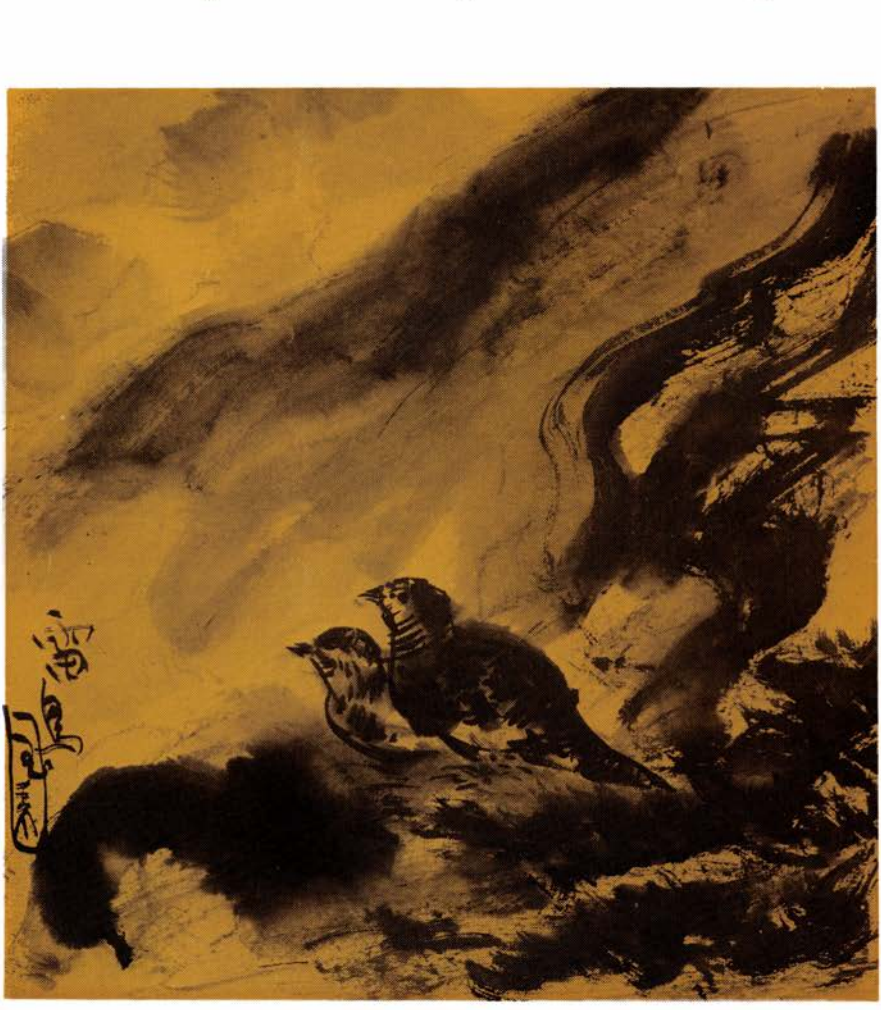
川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和五十七年六月二十五日　印刷
昭和五十七年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六六二号



日川協加盟

No. 662

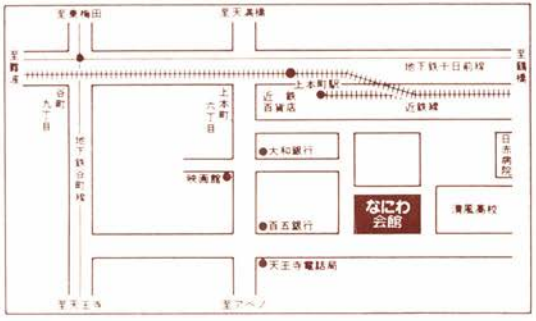
七月号

本社句会の会場が七月から変ります

〈新しい会場〉 **なにわ会館**

大阪市天王寺区石ケ辻町19—12
電話 06（772）1441（大代表）

・地下鉄谷町九丁目駅から徒歩7分
・市バス上本町六丁目から徒歩3分
・近鉄上本町駅から　徒歩3分



川柳塔社

気どったカッコウはきらいだ、
思いのままに
装うのはいいものだ、
熱い心を満たす
オーエスケージェフ。

OSK JEFF ORIGINAL DESIGN®

株式会社オーエスケー

宴会で漢法薬のメモをとり

吊革の鼻それぞれの自己主張

自由業と書いた所得の桁違い

随筆の才女和服の似合う人

補聴器でホトトギスきく趣味の会

西尾　栞

太公望

釣れますかなどと文王傍へより

旧制中学の二年生の国語の本に、この句と外に三、四句載っていて、初めて川柳という名を知った。

川柳は庶民の文学などと言うて、町内の熊さん、八さんの詠んだもののように言われた事もあったが、この句からして中国の故事来歴を知った者で、即ち博学の士でなければ作れないということがよくわかるのである。

殷(いん)の時代中国の東海地方に、姓は呂(りょ)、名は尚(しょう)という人がいた。古今の歴史に通じ、特に政の学を修め随一の士と称された。然し当時は紙がなく、木簡や竹簡で学ばねばならないので、呂家は資産家ではあったが、段々窮乏の生活に落ちた。

郷人は宮に仕えることを望んだが時恰も、かの有名な暴君紂(ちゅう)王の時代であった。

呂尚は渭水で魚釣りをしながら世相に超然としていた。周の文王の祖父は――何時か聖人が周に来て、周の国はその人を得て盛んになる――と予言していたので文王はその出現を待ち望んでいた。

或る狩猟の日、当時の習慣として占いをしたところ、今日の獲物は鷹や虎ではなく、覇王を補佐する人物に出会うとの卦が出たので、文王は今日の狩猟を大変楽しみにして出かけた。渭水のほとりで白髪長髯の聖人らしい人物が釣りをしていたので、是非にとお誘いして色々訊ねたところ、果せるかな博学卓見の士であった。

この人こそ、祖父の太公が待望していた人物であると、そこで、太公が望んでいた人という意味で、太公望という号をつけて施政の枢機に用いた。文王の子武王は、この太公望を得て念願の紂王を倒して、周の国を盛大にしたという。

現在は正に釣りブームである。川柳家にも愛好者が多い。然し川柳家は魚獲を目的としているのではなく、その気宇を楽しみ、色々と柳想を練っているのであろう。

太公望の釣りも竿の先には、曲げていない真直ぐな針をつけていたと言われている。そんな真直ぐな針で魚を釣っていた太公望を以て、現在釣人のことを俗に太公望というのは仲々面白い。

釣る人の根気見ているのも根気　漁人

という句があるが釣人の哲学もまた、川柳と一脈相通ずるものがある。

釣り人も景となってる雨の瀞　栞

川柳塔七月号

座右の句

片肌を脱ぎ双肌になる太鼓　（薫風）

私の句

泣くまいぞ化粧くずれが怖いから　稲葉冬葉

川柳塔　七月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

太公望……西尾栞…(1)
如是我聞……若本多久志…(2)
川柳塔（同人吟）……若本多久志選…(4)
自選集……東野大八…(30)
■川柳太平記(50)　明治柳誌時代の開幕……(28)
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（七丁）……(32)
水煙抄……黒川紫香選…(34)
句評リレー（小砂白汀・越智一水・三井酔夢・水粉千翁）……(46)
秀句鑑賞
　同人吟……河村日満…(51)
　水煙抄……村上春巳…(55)

如是我聞

―恩師麻生路郎の川柳観―

若本多久志

『私は川柳を人間陶冶の詩であると言っている。人間へ締め木を当てて絞ると、いろいろな悪汁が流れ出て、そのあとには朗らかな

愛染帖……橘高薫風選…(52)
「新　聞」……林　露杖選…(56)
一路集「乗り気」……文川一念選…(56)
「ひと言」……松原寿子選…(57)
初歩教室……本田恵二朗…(58)
川柳の冒瀆……直原七面山…(60)
一分間の柳論……藤井春日…(60)
柳界展望……(61)
白岩文衛句集「出会い」出版記念句会……(63)
各地柳壇（佳句地10選／那須鎮彦選）……(67)
編集後記……薫風・酔々・鬼遊・史好…(74)

座右の句

雑草の花小さければしじみ蝶　（酔々）

私の句

降ってわいた夢でカメラの中にいる　西川景子

脱俗した人間が残るのではないかと思う。その絞め木の役を川柳が果してくれているように思えてならない。句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸であるからである。

人間は生れながらにして跪くように出来ている。しかし、いくら跪いてもどうにもならないことに気付かないようである。然し私は川柳することによって、体内の悪汁を排出することに成功している。だから私にとって川柳することは単なる趣味ではなくて、人生をいかに生きるかということを知るためである。

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

の句は私の人生観、

人類は悲しからずや左派と右派

の句は私の世界観なのである。〟

麻生路郎先生は、以上のように、学生叢書「川柳とは何か」で述べておられる。それ故我われは、人間陶冶の詩を片時も忘れぬよう心掛けているのである。

路郎先生は昭和四十年七月七日逝去された。戒名、柳粋院釈路郎、今年はその十八回忌を迎える。

松原市　谷垣史好

これが最後これが最後と言うて会い
おずおずと触れる倖せ薄い胸
ほっといてと言われて男ほっとけず
雨や憂し家庭医学の赤い本

樋口一峯さん逝く（二句）

世の中の先を見ていた目と鼻と
居合抜き　鬼のド肝を抜いてやれ

倉敷市　小野克枝

盲目の友へあしたは着くテープ
鮮明な足跡だった愛だった
仲の良い女ふたりの二つ屋根
辛らつな言葉を愛と受けとれぬ
色メガネはずすと誤解がとけてくる
かたつむり夫婦でいつもどん尻で

和歌山市　西山幸

若本多久志選

気位の高さで門は朽ちてゆく
時効まで慎み深くしていよう
神妙におんなひとりの隠し釘
絵硝子のむこうに一つ嘘がある
ちりめんの袱紗のなかの会者定離

青森市　工藤甲吉

いのちまで見せて白魚透きとおり
目に見えぬ世界にもあるからみ合い
だまし舟ばかり世の中気が疲れ
人間をカネとモノとが汚くし
啄木忌じっと手を見る人ばかり

鳥取市　小林由多香

同情へひととき痛み救われる
翩翻と日の丸暗い過去見せず
腹割って話せば敗者にされそうで
先頭を走れば孤独つきまとい

大ジョッキ握る夜空が美しい

島根県　小砂白汀

激論の外で揺れてるヤジロベー
ほととぎす谿のみどりに突っかかり
酔狂と割り切れかねる刺もらい
水虫よ然え尽きるまで生きようぞ
アルミ貨がことさら白い墓碑の雨

和歌山市　野村太茂津

骨っぽい男ばかりがついて来る
縺れ糸弄ばれている惑い
承け入れる胸のスケール違い過ぎ
もやもやを払いに走る青葉道
叱咤してみたらじんわり燃え出した

鳥取県　林露杖

山草展花の可憐にある神秘
念入りに子の釣書をしたためる
労働の充実感を湯に浸す
神経痛宥めて渡る歩道橋
ぐれた子を必死に庇う母哀し

和歌山市　内芝登志代

青い瞳も交って祭り盛り上げる
あっさりとした味年季のこくがある
青畳やっぱり日本の匂いする
叩かれても蠅は悪いと思ってず
ライバルも入学新たに湧くファイト

島根県　錦織文子

倖せのとどく受話器は軽く持ち
倖せよと女心の自尊心
咲いて散る花のやさしさは信じよう
忍従のつぼ破りたき石つぶて
味方ではなかった愚痴は忘れよう

堺市　大道美乙女

無駄骨と思う日もある蟻の汗
指切りの小指知ってる嘘とうそ
逆境も明日を生き抜く夢を持つ
本閉じて女は春の夢を追う
歯こぼれの櫛がいとしい亡母を恋う

大阪市　江城修史

楯となる妻よ赤旗ふりたかろ
愚痴一つ吐かぬ気負いをあわれとも
亡父の主義私に残る心の灯
子の夢に賭けんか老いの残り火を
二人三脚夫婦で守る居職の日

堺市　藤井一二三

黒部への旅（三句）

カラオケに預けてガイド息をつく
トロッコがむせる若葉を分けてゆく
ダムに生きる男の汗も青葉越し
熟年の背を励ます若葉萌ゆ
みずみずしい若葉が過去を呼び戻す

春うらら新入生の靴が鳴る
初恋の思い出五月の風薫る
人形師人形に魂もってかれ
辛棒を説く母の目も濡れている
香を焚き亡夫を偲ぶ雨続き

岸和田市　古野ひで

星くずのような都会の灯におぼれ
その夜の心がうつる影法師
下心あってお酒を注ぎこぼし
風見鶏風のない日の雲といる
角もとれ静かに下る女坂

西宮市　藤村〆女

人情をしかと覚って惨めな日
此処まではがむしゃらすぎた庭いじり
子を褒めてくれただけとはふと佗し
二級酒でよかろう愚痴の相手なら
夕立へ布団とりこむ仲直り

和歌山市　若宮武雄

剣聖の筆跡厳し芝桜
霧島の紅に武蔵の剣が冴え
青春の我が剣しのぶ二刀流
仏神を頼まぬ武蔵わが思い
大原の里に別れる雨の中

八尾市　香川酔々

一日の感謝晩鐘聞くように
たいくつを知らぬ女に使われる
謙譲の美徳は夫婦だけに生き
ぬくもりに心がなごむマイペット
生きているだから働くだけのこと

大阪市　津守柳伸

みにくさも亡母に繋がる座りだこ
夫の顔をこっそり漫画に描いてみる
なれ合いで旗を振ってる蟻の群れ
風の便りへひそかな闘志湧かせてる
逢いたい人はいつも逢いたいままがよい

大阪市　村上田鶴子

虹の橋大和の池の多いとこ
憎めない男のくれただまし舟
バード週間私ひとりがはぐれ鳥
肩書がほしくて本の紙魚になる
過去すてた男が生きてく木綿針

桜井市　岩本雀踊子

悪人と言われる人に庇われる
ハラジュクへ出かける老いの白い靴
鉄兜その下の顔いまは亡き
休耕田一揆の旗を忘れたか
二幕目は蓮のうてなで本を読む

八尾市　高杉鬼遊

人生設計山の高さにある望み

富田林市　和田維久子

雲行きは雲にまかせて足袋を干す
明治大正　文珠の知恵も楽屋裏
老いの坂もう逆らわずいる日向
医師ある日人を助けるための嘘

八尾市　大路美幸

いつまでも父よと祈る百度石
負けた日は限りなく追う母の雲
父母が合わす両掌に棲んでいる
小商人ひと夜数字を離れたし
別れても心に残る影法師

富田林市　岩田美代

水色の帽子で五月とペダル踏む
葉桜や忘れぬことが多過ぎて
老いている鳩らしい豆をわんさやる
絢爛の牡丹の崩れがふと哀し
磨いてもみがいても光らない勲章

米子市　野坂なみ

長弔詞わざわざ添えて式が冷え
貰い泣き誘う涙も孤児へ溶け
善意積む心に深い祈り抱く
迷うこと多し仏間にまた坐り
観賞の吐息へ鯉の水しぶき

大阪市　小出智子

丸いポストに出逢うたときの懐かしさ
中年をいつまで通す夏みかん
風鈴はまだ子離れが出来てない
塗下駄に素足も夢となりにけり
マッシュルームカット強い男は減ってゆく

吹田市　西川景子

木曽路にて

藤村の息吹きを馬篭宿の坂
たわむれの恋を妻篭の軒行燈
水甘き寝覚の床で聞くロマン
花と酔う木曽の地酒は仕掛人
御岳の根雪は煩悩の味と知る

八尾市　高橋夕花

妻なのか母なのか日々繰り返す
出船入り船見送ることの多かりき
したたかに生きねばならぬ雨烈し
あじさいの私語がきこえる雨の寺
一切を無にしてからの出発だ

高槻市　田崎あき子

人嫌い定退後には孫が友
旅楽し笑いを道に蒔いて来る
失恋の昔を語り合える年
師の温情思えば胸に熱きもの
伸びる間の無い爪を切る潔癖家

松原市　玉置重人

かんじんなとこは伏線ぼかしとく
ひとり飲む素顔の翳を見てしまい

恩すこし実印一晩考える
栄転を祝う拍手に嘘ひとつ
ライバルのある日の背中大きすぎ

米子市　小西雄々

転落の詩集に触れぬ本籍地
衿あしを風がくすぐる歩道橋
チャンスなど運命線にない吐息
金力に主張を曲げて灯がゆれる
混雑に馴れた都会の灯を愛す

神戸市　仲どんたく

息災の老い日輪へ手を合わせ
美術館巡りの老いへ春注ぐ
火葬場の烏は獄吏の顔で立ち
俗臭を絶ち切れぬまま有髪の僧
残り火で温くめ合うてる老いの杖

島根県　堀江正朗

指先に苛立ちを知る点字本
おしゃれした妻に似合って着せられる
口下手の電話は嘘がよう言えぬ
蟬鳴いて耳からも夏やってくる
追いつけぬ速さくるくる四季の風

島根県　堀江芳子

ラブレター封切るように友のふみ
ふるさとへ夢駆けていく五色豆
嫌な夢だったきれいに歯を磨く
なに流でなくても憩う床の花
小包へ娘のありがたさ解いていく

竹原市　小島蘭幸

母が来ると夫おしめを替えたがる
おふくろも風もやさしくなるばかり
ひとりになればかなぐり捨てるものがある
六根のひとつ欠けてもやすらげぬ
禁酒解除の日の盃は舐めておく

倉敷市　藤井春日

本心を労使互に探り合い
リラの花濡れて色増す春の雨
郷愁を誘う訛りのなつかしい
二人酒生きるつらさを語りつつ
かすかなる思い出母の背が温くい

大阪市　天正千梢

目標を遂げし社員の虚無な顔
善意に見せて微妙な線を引き
降り続く雨に礼言うひとりぼち
落人の歴史悲しやダムの底
シンフォニーの余韻に酔うている平和

大阪市　川口弘生

母一人子一人の愛絡みつき
ハイヒール美人に踏まれても痛い
健やかなら他人の生命の灯もほしい
肺癌になる気と煙草へ妻子の目

適齢期たった一人にまだ会えず
諫早市　原田明春

許さねば死ぬと同棲強気なり
同棲を許す気親から荷が届き
縄のれん男の顔が生きて来る
わが家には忘れず帰る千鳥足
片思い絶壁に咲く花のごと
岸和田市　植山武助

給料日とにかく借りは返しとき
満ち足りた顔悠々と終電車
一日で悲鳴をあげた妻の留守
手真似まで入れ電話での釣自慢
プラン組むことが好きだから幹事
大阪市　山根いつを

五欲すて只の三日が生きられず
商談に経験からの信号機
手がふれる別れはきっとまた逢える
赤旗も黄旗も妻はもっている
満ち潮に波一つずつ生む命
新宮市　大矢十郎

子に美山残さず植樹せぬと決め
つきあったお茶が悲しい幕を開け
薬石の効とはさもし選手権
喪服着ていても喪服を振りかえり
師の影を踏んで覚えた舞扇
鳥取県　川崎秋女

遊歩道あなたと私の靴ならぶ
貧しさは言わず見上げる鯉のぼり
家のこと忘れ五月の陽に遊ぶ
本音まだ吐けずに煽るコップ酒
黒枠をかざる写真も撮っておこ
京都市　都倉求芽

それぞれの思いであじさいにたまる露
忙しい合間を土鈴に無を貰う
まわり道するからいつも誤解され
いい風をあつめて回る風車
朝顔の双葉に爽やかな陽よ風よ
寝屋川市　宮尾あいき

爪を立てると夏がはじけるレモン
娘の慕情胸に浸み込む百合の花
ひろいあげたバラに掌突き刺され
金の無い者程強い者は無い
蝶々にも好きな花あり鬼あざみ
和歌山市　福本英子

菊に逢う約束をするぼたん寺
土の香の失せた早苗につむじ風
母に肩揉ませて母の日も暮れる
人を待つ五月の庭も暮れなずむ
愛されることだけを待つ女たち
寝屋川市　柴田英壬子

通院の道ムンムンと緑炎え
孤独など海は久遠の愛寄せる
くちなしの香りに微笑とり戻し
江戸千代紙幼きころの夢ロマン
姑が実家の躾に折れている

松江市　恒松叮紅

セールスへ断るにいい妻の留守
魚にも祝膳に載る運不運
履歴書を汚さぬ男の潔癖性
晴耕雨読我が一坪に苗が出来
スケジュールネクタイ今日は替えて出る

三重県　川上渓水

善人の働く汗が安すぎる
背に母の視線が痛い参観日
父の日の父の無口が照れている
友情という財産を持てる幸
期待して失望それでも旅が好き

大阪市　西出楓楽

淋しさよ背中の中を風が吹く
もう少し呑気になれと偏頭痛
皺かくす役も負うてるサングラス
胸に棲む魔性を夢にみせられる
反省をすれば愚痴めくことばかり

大阪市　金井文秋

マンネリに亀はぐずだと笑えるか
使いようで切れる長所が一つある
ワンマンも妻のタクトは無視できぬ
生きて行く嘘が成人してわかり
雑学を身につけ話題こと欠かず

八尾市　宮西弥生

三面鏡おきかえ女となるこころ
いたわりの言葉が刺さる年となる
男と女のたたかい亡びるまでつづく
数字追う業はやめよう風光る
ちっぽけに咲いても心うつ山つつじ

羽曳野市　榎本吐来

背水の詩境引出す酒を汲む
進学に折れ単身の鄙に発つ
じっくりと聞いてやる気の酒を注ぐ
車椅子の轍確かに明日を呼ぶ
痛いとこぐっと握っている無口

米子市　林瑞枝

逃げ道も知りかけひきの網を張り
窓開けて心で誘う初夏の風
花一輪迷いの坂で鈴を振る
贅沢な悩み聞くのもクラス会
瞬きの人生に足の跡ひとつ

和歌山市　松原寿子

泥舟と知ってさすらう愛もある
灰の中探れば深い罪がある

名残りつきない裏側へ降る修羅の雨
川は流れる生きねばならぬさだめ舟
睡蓮の気品が不意にまぶしすぎ
岡山県　嘉数兆代賀

愛の糸つむぎつづけた糸車
期待した春が素通りして青葉
貧しさの愚痴もこぼさぬ小銭入れ
限界の絵筆で痩せた虹を描く
水たまり手を貸す夫がいてくれる
宇部市　平田実男

歳月は人また恩を忘れさせ
鯉のぼり風より期待をふくまされ
精薄児の仕合わせみんな花に見え
嫁ぐ日を決めた娘が他人めく
会社では上司ギャンブルでは仲間
竹原市　森井菁居

手加減をせぬライバルで愛すべし
虹を追う男にゴールなど要らぬ
十二支のどれも励みにして平安
切り札の田地に先祖棲み給う
男一匹未練はとうに捨てている
大阪市　鍛原千里

燃えつきて恋に溶けゆくガラス玉
物憂げに躰を抜ける初夏の風
荒れた手へ今日の涙は愚痴るまい
現実に戻る時計のネジを巻く
見つけた白髪悲しくていとしくて
七尾市　松高秀峰

盆栽が枯れて未練の父淋し
傍目には見せぬ未練のある涙
すらすらと読めぬ弔辞が涙声
善悪のけじめを知らぬ子に育ち
重い荷を背負って里の母が来る
東大阪市　奥山弥山人

鵄尾放光古都に昭和の彩を添え
母も娘も個性ころしてする見合い
枯枝を生かしていける名人芸
金魚売り声に明治の詩を聞く
はしご酒あふった頃をくやむ老い
神戸市　中村ゆきを

ひょうきん族戦争よりも愛をとる
一合の酒あれば佳し我が旅路
志大きく靴紐しめなおす
ヒステリーの妻へ煎じる薬なし
だまされた結婚でしたと二言目
京都市　松川杜的

東北の旅に
金色がまぶし辰子像の胸の線　（田沢湖）
半島の店　店ナマハゲが幅をとり　（男鹿半島）
激濤をアップに灯台を撮る入道崎　（〃）

武家屋敷しばしを抹茶の香にひたり（角館）
ウインドクリーナー旅の疲れを消して行く
岸和田市　島崎冨志子

ピーポーの音近づいてくる不安
老いてなお夫婦でつなぐ夢楽し
一人娘を嫁かせる覚悟だけはする
逝きし子よ母が涙の梅雨となる
健康すぎて五十肩に弱音はく
松山市　谷真風

あたたかい人になろうと道を掃く
はがき一枚春雨の中ポストまで
伊予柑を供えて仏壇明るくなる
牛の声黙って聞いてる葱坊主
先生と呼ばれる重さ肩にあり
宝塚市　傍島静馬

神通力衰え鼻声嗄れる
諦めきれぬ柄あきらめる深呼吸
コンパクトトイレへ急ぐ退社ベル
デカンショになって仲居も崩れ出し
次次に同病退院する焦り
兵庫県　辻文平

祝われて手紙が少しキザになる
雁の群れ一つが私に似ておくれ
一つあるほくろで運命決めたがり
楢山に僕が花の木植えてやる
ジョーカーの一つが残る旅の果て
米子市　八木千代

出陣の女で美容院が混む
生きて行くリズムへ音符並べまい
てのひらにいつまで取れぬ忌中札
なくすものもう何もない風の音
叱りとばすのも私で二タ役で
米子市　田中亜弥

かけひきへ高値で売れるにらみ鯛
新任で黒板の手がふるえ出し
巣立たせて部屋いっぱいに花かざる
民宿の部屋でとけ合う国訛り
陽を追うて素直に杉の天に伸び
大阪市　中川滋雀

枝豆の殻につましい酔いがある
五月雨の鐘も有情の落ち椿
無人駅いくさを捨てた顔が降り
密集の屋並みに情がしみている
藤棚に天を仰いで職がない
出雲市　原独仙

春陽濃し乞食も嫌うほどに焼け
同類句われ創作を憚らず
お茶汲みが人物査定とは知らず
抜き捨てた雑草執念の根を降ろし
春日遅々巨人連敗風呂に入る

大阪市　河井庸佑

土地柄に合わす苦労を人知らず
非行の芽見逃がし先生うろたえる
価値観の違う会議でまたもめ
締め加減ゆるめ加減を子は感じ
頭からどなるだけだと知っている

米子市　青戸田鶴

匂い立つ若葉いのちをいとおしむ
母の日へ電話ひとつのプレゼント
平穏に伸びた若さに芯がない
これだけが私の奢り本を積む
旅情煽り立て常夏の樹が燃える

大阪市　北勝美

枝伸びて信号隠すプラタナス
生い茂る中で蕨の逞しさ
ひそと伸び手折るわらびへ躊躇する
愛してるそんな言葉が欲しい妻
わかってもそれが出来ぬが凡人か

鳥取市　有田とし江

傷心を流してくれる雨が好き
よろこびがあるから雨に濡れてゆく
春だなあ老いも老いなりに燃えている
老いてまだ愛美しく遠く住む
野も山もああなつかしい日のドラマ

東大阪市　市場没食子

八十八夜まだ年寄りに炬燵要り
フラスコの底で溶けよか溶けまいか
おばんでも混ぜると酒の座がはずみ
はた目にも泊りの旅行は無理な齢
妻が座すまで待っとれず箸をとり

米子市　政岡日枝子

少女期の悩み日記にとじこめる
大の字の寝息明日が待っている
武器持たぬ筈の女が強すぎる
嘘のせて舌コロコロと風見鶏
素敵な嘘男と女がもてあそぶ

笠岡市　松本忠三

意地ひとつ見せぬ女の幸せか
甘い汁吸い後味を苦くする
緊張をほぐす廊下でお前もか
揉手する仮面に腹が透けて見え
中座する頃合い仲居に耳打ちし

鳥取県　金川満春

堂々と無職と書いて誇る喜寿
健康は足から老いを走らせる
低成長レジャーブームも翳りみせ
公園のアベック老いは眼をそむけ
財閥は一と味違う門構え

大田市　藤田軒太楼

飾り気のない素顔さにある誠

しんみりと聞かせ同情引く無心
年寄の冷水一徹さが抜けず
求愛の身の上話しに尾ひれつけ
しんみりと古老が語る艶話

島根県　藤井明朗

窓開けてみどりの風と入れかえる
脇役でよし人生を丸く老い
実力と運はチャンスを逃がさない
親と子のキャッチボールを忘れてる
風はみどりさわやかなひとに逢う

米子市　桑原伊都

カラオケが続きそろそろ座がしらけ
派出所の灯りへ夜道すくわれる
エイプリルフール幼い嘘へのってやる
司会者が下戸で宴席盛り上げる
旧道においしい味もほそぼそと

和歌山市　細川稚代

故里の五月半ばの風に酔い
真実を貫いて来たおもい靴
仲直り胸にヨロイをつけている
真夏日へまわりばなした洗濯機
ハタを織る手許が狂う祭笛

和歌山市　浦野和子

妥協して真ん中染まらぬ彩を持ち
明暗をわけて郵便受が鳴る
乱舞して花はみどりへ座をゆずる
くず篭で本音眠っている手紙
地に還る輪廻を花は疑わず

和歌山市　坂口公子

干魚焼く臭いが美味い里の駅
金婚のポーズ苦手の肩を組む
天職の泥まんじゅうへ無い余念
雑音が嫌で苦手の舞いを舞う
疵一つ伏せて踏み切る仲直り

岸和田市　高橋操子

サンショウの花煮る母の満ちた顔
春の香のほのぼの若きふきをむく
サトウキビふるさと恋し母恋し
島民のくらしの知恵にあるむかし
いかに世は変れど日本の鯉のぼり

倉敷市　水粉千翁

長谷寺の牡丹に出逢うめおと杖
法悦のこころ彩るかな牡丹
考えておこうと何れ貸して呉れ
鈍行のせめて満ち足る旅でよし
ふり向けば出会う笑顔の中に住み

浜田市　佐々木裕

五月病親の方から発信し
目配ばせに会ってグラスの酒にむせ
嫁ぐ娘に言葉を探す夜の針

商売の昏に紅塗り妻勤む
初恋を枯れた夫婦が語り合う

京都市　山本規不風

癌でないと信ずる妻と旅の宿
言うことを沢山持って割らぬ口
さりげない符諜で人から助けられ
もらい子に老後をみんなもってかれ
どんな名をつけても親の血が流れ

島根県　木村はじめ

老い二人献立のない食が済み
支えられ支えて迎えた金婚日
慈母の持つ涙の壺に底がない
我をころし合って夫婦にある笑顔
一言が過ぎて佗しい膳につく

伊丹市　樫谷寿馬

素顔の母が今も一番美しく
お隣りの人柄貰う庭の花
旗と歌は死なず祖国のある限り
八重桜大樹となりて悔いがあり
辞令片手にジョッキ一際透き徹る

岸和田市　原さよ子

母の日に貰った鉢が咲き乱れ
石段で齢をはっきり知らされる
ぽたん園抜けると苗を売っている
髪染めて気になり出した顔の皺
歯医者　外科　眼科と老いの時間割

松江市　柳楽鶴丸

床の間に歳時記にない花を活け
ミクロとマクロの父娘です
思想は違ってもなつかしい親友
定年後へ僕のレールを敷いておく
自称中流がコシヒカリを食べる

大阪市　那須鎮彦

思い出の友は遠くの風となる
すばらしき生命へ昇る朝日かな
まっ青な五月で風も青く透け
過去を忘れる美しき夕陽落つ
凡人は道義の糸を太くする

羽曳野市　塩満敏

銀婚の和泉ナンバー追い越され
萩　津和野来れば明治が生きている
名物でござい萩焼き軒ならべ
ビール腹歩け歩けと万歩計
入学の甥に図書券はずんどく

松江市　小林孤呂二

花に酔う大和男子も若くなり
もうそこは女の季節ぽたん咲く
若葉よし地酒を交す友が来る
親ゆずりの声にカラオケ向けてこず
エレベーターなら指図どおりに動き

島根県　榊原秀子

鶯の啼く音きかぬに春がたち
みえすいた嘘を丸飲みしてあげる
歯車が回りかねてる向い風
平和観音の御胸に決して叛くまじ
音楽会洗脳される久しぶり

松江市　舟木与根一

無雑作に輪ゴムで届く温かさ
年金の幅一ぱいに趣味増やし
採決へ紅一点が骨を抜き
そっくりでひやひや息子の青春譜
香水に少うし不倫の恋混じる

西宮市　野呂鵜汀

又しても旅は疲れるものと言う
不味いとも言えずに茶碗二度はこぶ
冗談のその本心が胸をさし
高齢の我が子を案じ親愚か
いつまでも嫁かせず父はおいとく気

岡山市　川端柳子

追憶や風が運んでくる返事
その気持嬉しく嫁の知恵を購う
いやなことやというのにひまがいり
もの言わぬ花のけんめいさに魅かれ
真実を探ぐる埠頭の春がすみ

岡山市　井上柳五郎

日本海テトラポットに似合う波
浪速の旅人と車に酔い帰り
合づちのほんと本当が疳さわり
言いにくい話を妻につつかれて
くやし涙自己主張は胸に溜め

平田市　久家代仕男

ひと葉ずつ風にめくれて初夏に入る
歳かいな孫の新語に辞書を繰り
仏からもらう仕合せなら信じ
金策でまるいこころに逢うてくる
葱坊主競い五月の風に媚び

守口市　野呂右近

風圧に堪え古稀も過ぎ喜寿も指呼
鵜の真似する烏が笑えない時も
疑えばすべて空虚に映る幕
辞職して責任とれぬ小商人
茶柱が凡人の足はずませる

大阪市　本間満津子

ブラジルより母の日に

遠い子に電話で貰うカーネーション
定期便一日遅れた日の長さ
空腹でいつも郵便受け覗く
傷持っているから恐い顔をする
飛躍する若さに根性追いつけず

東大阪市　崎山美子

理性だんだん置き忘れて行く梯子酒
亀で良い今日も確かな歩を進め
子の前途親の好みの色をぬる
プランにはなかった二浪のにがい春
個性的ですねと悪筆ほめられる

富田林市　中村優

諸行無常亡母が次第に若くなる
咲くまでは黙っています花の種
敗戦を終戦と解く走馬燈
おにぎりを買って亡母恋うひとり者
熟年の思想転がる投書欄

藤井寺市　児島与呂志

戦友会（二句）

戦友が居る限り私をくずすまじ
気がかりをすこうし持っている中支
母の目に不安を残すアイシャドー
二児の母ソフトボールの乳房ゆれ
うっかりと妥協しそうな酒を受け

西宮市　杉浦婦美子

少しずつ遅れる時計が性にあい
母さんの辞書に疑う文字がない
愚痴を聞く時は片耳だけで足り
木の芽合え母が秘訣を置いて去に
トンネルの向うにいつも憧れる

寝屋川市　江口度

ことさらに美は競わない草花よ
鯉のぼりひきつれ進まん風見鶏
メクラ判ついたプランが大ヒット
へまをするロボット見つけるのが仕事
メンツから軍艦沈めあうことも

桜井市　河合茂雄

ボロボロになるまで回る父の独楽
耐えること女は母を見て覚え
魂を抜いて歌えば風になる
妥協せぬ拳の中にある白紙
ワンマンの星が夜明けに残される

倉吉市　渡辺菩句

このさくら女をぷんと匂わせる
ゆきずりの美人のような山桜
一寸の虫でも伴侶を探してる
パンジーの大きな眸とにらめっこ
鯉のぼりダラリ奮励努力せよ

浜田市　中川幸一

正論という名の野暮を持て余す
振っといてまた来てねとはよう言うた
緊迫の空気に無駄な換気扇
聴えない大きな地球回る音
老犬があおお前かと欠伸する

倉敷市　稲田豊作

損をする覚悟が出来て和解の座

盃へ妻は物価を口にせぬ
発奮をすると老体悲鳴あげ
所得税がよく頑張ったねと笑う
退職の課長磯釣り一年生

鳥取県　清水一保

鷲の悲哀は知らずいい鳴音
俺と来て遊べや彼女の無い雀
ダイナミックな恋それ以上な失恋
万歳をして二次会に前進し
三三九度離婚なんかはしない顔

美祢市　安平次弘道

キューピット二の矢もはずれ恋終る
自問自答閨の深さをはかりかね
移り香へ女の理性もろくなる
図鑑には載らない蝶で愛に飢え
シナリオのない人生を模索する

松江市　梅本登美也

細ぼそと夫婦で守る屋台の灯
女医さんもナースに混じるあみだくじ
胎動に責の重さを噛みしめる
さすらいの旅に野菊が呼びかける
草分けの耳に野鳥の声が住む

和歌山市　坂部紀久子

筍の歯ごたえ今朝の愚痴忘れ
初孫の病気へこっそりお茶を絶つ
病んでいる子へ鎧武者術もなく
からっきし無芸でお茶汲み引受ける
大海を両手ですくう程の幸

島根県　西村早苗

底なしに人を信じていた無能
傷ついてもつれを捨てる旅に発ち
やすらぎの灯が終点に見えはじめ
春の雨行商今日も濡れる旅
意見する方も震えた声となり

柳井市　弘津柳慶

のぞき見を天狗は鼻であきらめる
決心がつかず思案の紅を引き
お別れの握手へ寂しい肩の線
鍵握る男図々しくのさばって
面影を弥陀のお顔に見つけたり

岸和田市　狭間希久志

軽口が思わぬ人の胸を刺し
日を徒食　兜の緒は緩みがち
肥満の娘　今朝も姿見こすってる
故郷の峠が好きで北帰行
定年がふと耳すます鳥の声

竹原市　時広一路

貝殻は海の童話を語れない
鳩が群れ飛んで平和な街に見せ
旅続く絆の糸を編みながら

曲り角轍の後はもう追わぬ
蠅の眼に硝子は硝子なのだろか

倉吉市　奥谷弘朗

節約が立前ケチが本音です
子のことになると子無し口を閉じ
気の強い女房ひと言多すぎる
頑固でも明治男に骨がある
叱らない父のひと言よくこたえ

堺市　高橋千万子

便り書く愛の深さにおぼれつつ
待つことに慣れた女で耳を研ぐ
つき合いと夫にいどんだ軽いウソ
足の指も手伝うている汐干狩
終生の脇役でよし割烹着

唐津市　浜本久仁於

南無大慈大悲の下の昼寝かな
果しなく歩くしかない道に出る
またもとの二人にもどる子の帰京
予定地へ今年限りの花が咲き
拝啓と敬具へ墨はよくなじみ

羽曳野市　佐野白水

道明寺天満宮にて

筆供養の祝詞は修羅の前を抜け
筆供養子等真剣に祈ってる
蟻世界にも序列あり餌を運ぶ
老人に不協和音が多過ぎる
不協和音へ吾れ関せずと日々生きる

橿原市　岩井本蔭棒

本棚の背文字にしばし待たされる
朝露のままご先祖へ瓜供へ
こちらから見れば遺影もこちら向く
半生の悲願祖国の土に立つ
お念仏ぐらいでとても消えぬ罪

鳥取市　両川洋々

国防論どうあれ護国の森静か
寡婦ひとり一人芝居に疲れ果て
妻の鞭受けると駄馬の息が切れ
叛旗振る僕が返り血もろに浴び
男という玩具をハイミスもてあそぶ

鳥取県　鈴木村諷子

五人には五人日本一の母
すこし大きくて五百円貨の放り甲斐
今日もまた夫婦漫才地でいこか
牛の瞳にきれいな虹が映らない
女房の立場に立って姉と呼ぶ

兵庫県　大江秋月

下を向いて歩こう退職後の田舎
山百合の咲く故郷に母が居る
いい夢を見たか元気な朝雀
坪五十万とは知らずみみず住む

クリームがメンタムになる妻の夜

海南市　牛尾緑良（緑楼改め）

終着で荷物ひとつを子に託す
刑期まだ終えぬ女囚の長い髪
親の膣鋳型の中で食いつぶす
役付きの女の爪は研いである
脱皮して蝶が手にしたサングラス

兵庫県　遠山可住

百年の歴史敷居が丸くなり
百歳の葬にあやかる笑い声
死火山にため息がある山つつじ
春一番かつらが飛んだ裾模様
少年の夢を頂上の雲が聞き

倉吉市　野中御前

ウインドはひと足先の彩を着る
滞納の赤い活字が容赦せぬ
札束を撒けば群がる夜の鯉
本音ちょっぴり酒のせいにする
肉食の好きな老爺にぞっとする

兵庫県　藤後実男

橋渡るまでに言訳考える
左遷地でいい友達と縄のれん
妻だけが鍵をもってる玉手箱
スーパーへ化粧している市場竜

松原市　北野久子

連休をあなたあなたとこき使い
浮き腰で釣書を持って行ったまま
親娘でも時には女の火花散る
デパートの椅子は孤老に占拠され

呉市　林野甦光

忠告を背に逆らった酔い加減
うなずいて胸に仕舞っておく温み
睡蓮へ雨傘で立つ橋があり
団地の灯人なつかしく風に揺れ

守口市　羽原静歩

雲の峰モクモク動き旅心
誓詞読む後姿が美しい
サロンパス昨日の愚痴も貼っている
使い捨て聖徳太子も呆れてる

東大阪市　斉藤三十四

祝日の国旗は年寄が立て
自分だけ分ったつもりの舌たらず
土壇場に立って男の肚決める
神経の太い男はよく眠る

西宮市　林はつ絵

コーヒーの湯気の中から今日が湧く
まな板のリズム母には母の歌
逢えば愚痴こころの澱が流される
生臭い話も聞いて鐘の音

大阪市　杉本智慧子

訣れねばならぬ定めを思うまい
涙見せぬ顔に苦労を越えた笑み
ただ歩く都心の緑嬉しくて
掌に友の便りが温かい

西宮市　妹尾春江

善い方にとって心を休ませる
共白髪のはずの夫が染めてくる
未来図に夫婦がやっと歩み寄り
亡母の知恵小だしに娘らへ分けていく

大阪市　西森花村

老人会おもいおもいの足の幅
合格祈願学費値下げも頼みます
大阪も京も野良犬同じ顔
高貴薬のように新茶に頭下げ

大阪市　神夏磯道子

売る人の愚痴聞きながら特価品
ほどほどの強さで木綿の肌ざわり
結局は絆に戻る弱さかな
何事もなく夕食へ豆をむく

ホノルル　前山北海

一言が予期せぬツラブル招く破目
つくろわぬ言葉でどうやら身を支え
五月雨に続く老友のラジオの訃
白い花胸に追慕や母の日に

竹原市　山内静水

母の日の義母ちょこりんとおわします
シッコする二歳まさしく男の子
人形の仕着せあんよまだ出来ず
嫁く気などさらさら二十五にもなり

玉野市　小谷仙山

打ち込んだ杭が権利を主張する
パン屑を雀に老いの小半刻
戦争反対武者人形は平和主義
黄金の夢まださめやらぬ休耕田

今治市　越智一水

虫つかぬ内に娘はやると決め
娘の見合振って振られてから決り
淋しさはかくし切れない後姿
夏便り第一筆は母に書く

藤井寺市　中原比呂志

深い夜のヒントにペンが走り出す
抵抗も無く長針が越す零時
並べるとにわかに強気の石となり
カナリヤのさえずり垣根の不和を越え

東大阪市　竹中綾珠

知恩院で法然偲び数珠を繰る
見学の旧家囲炉裏を焚いてくれ
九谷焼旅の小遣いでは買えず
輪島塗箸を土産に買っただけ

島根県　松本文子

眼を閉じて言葉のトゲに耐えている
運命の河の流れは知らぬまま
ひょっこりと生れひっそり死んでいく
這いあがる気力も親という虫で

島根県　栂　みどり

すきま風愚痴めく話ねむらせず
美しい星空やがて涙する
法要の灯り思い出囲む夜
アップリケゆらゆら可愛いい孫の顔

下関市　国弘　半休門

神さまへ投げて叩いて祈願する
老いらくのみず児供養をしてもどり
国鉄の制服で居て縮こまる
跡取りが欲しい二号の児を認め

鳥取市　森田　熊生

生ビール一気にぐちはもうやめる
過去はもう水に流したいびきかく
平凡に今日が終った日記書く
裏の裏読んでる顔でだまされる

大阪市　柳原　静香

お互いを大切にして老いの坂
石楠花の路信心の貌でなし
南無観世音スリに注意と書いてある
青葉路ゆっくり回る夫婦独楽

大阪市　西川　善紫

気がつけばみ仏の深い深い慈悲
懲りもせず当たる当てないくじを買い
世渡り下手でも盗泉の水飲まず
女湯やと気付いた時はもう遅い

島根県　山根　峰雪

ねたきりの身がもどかしく妻となり
帰る子の土産に野菜積んでやり
人のこと言う人のかく大いびき
口に出し言えない事を書く日記

奈良県　村上　春巳

武者人形大負けに負け松屋町
ペンダコを軍手で庇う花畑
雨垂れの力強さよ野の仏
隣りから老いの生活へかしわ餅

倉敷市　小幡　里風

ある不貞男が鬼の面かぶる
鯉のぼり女系は歌う雛まつり
勲章を貰う人あり花は散る
マイペース崩す五月の風が吹く

米子市　雑賀　美世

励ましと知りつつ痛い愛の鞭
腕白が病めばおもちゃも淋しがり
許されて術後の水のおいしさよ
捨てられた野菜も小さな芽を伸ばし

大阪市　横地　雅風

まだ資格あります年金調査表
これっきり古稀のボーナス嚙いた
趣味もなくぽっくり寺へ足が向き
妻の座が小さく見える月給日

大阪市　藤田頂留子

平等なものの一つに明日の空
夏祭り亡兄のおもかげ追いかける
ウインドーのダイヤ冷たい女の眼
夢買った筈でもおしいと思うくじ

町田市　竹内紫錆

風力の電気エジソン見にきそう
監督のベンチで白くなった髪
黙禱も警備もせずにカメラマン
紙袋魚群のように見本市

大東市　土岐トク子

メキシコへ届く日本の母の声
才たけた嫁でそつない思いやり

母の日（二句）

ぬくもりが胸にひろがり受話器おく
イニシャルを入れて母の日プレゼント

米子市　寺沢みど里

いのち綱つなぎ合わせてやっと生き
酒宴から遠のく老父の背の丸み
延びのびのお詫びをせめて墨で書き
法灯の寄進へ町の灯もゆれる

米子市　菅井とも子

満願の菩薩に亡母の貌だぶり
にらまれた俎上の鯉に手がふるえ
日の丸を今朝は叙勲の瞳で見上げ
金婚の父母が大きく見えた宴

岡山市　時末一灯

肚と口一直線の友と酌む
新入社必要悪という教え
美しく老いたい目にも巷の灯
骨壺へ逃げこんで行った黙秘権

大阪市　岡田ふみ

一と泣きをさせて帰りの孫の家
葉桜にそれぞれ名残りが惜しい春
税金を美味しく飲んでるナポレオン
お隣の大漁うちの膳ゆたか

和歌山市　垂井千寿子

第三者だけが味方と知る落ち目
永遠の命をもらう数珠と知る
争いはいや気の狭さ見抜かれる
女の業まだ燻ってる仲直り

島根県　大森孝華

寺の坂登る尼僧へ花吹雪
明日の風信じて閉じる詩日記
善人の歩む歩道へ向い風
雨をきくゆとりになって共白髪

岸和田市　清野こう

大掃除古新聞の記事拾う
満ちたりた産後の妻の寝息聞く
久米田池語り継がれる物語り
夢を買う給料貯めているバイト

和泉市　岡井やすお

母の日にプレゼントする肩叩き
おばあちゃんせっせと稽古孫のうた
雲の上から降りたいが降りられず
反核をしり目軍拡前へ進め

米子市　石垣花子

子ばなれの感傷も無い子だくさん
ナイターの逆転ビール飲み直し
栄転も左遷も泣いて発つホーム
痩脛をまだかじる気の大学院

和歌山県　天満三千代

話題また離れ住む娘や孫のこと
どん底の苦労が堆肥となる芽生え
親と子で組んだ積木は崩れない
憲法はともあれ晴天待つ農夫

河内長野市　井上喜酔

痛い程目の中に入れて孫の守り
ぐらついた心をセールス見逃がさず
返り咲く苦労は笑顔が知っている
残念な返事へ仲人黙り込み

香川県　岡田拳法

本音吐く政治家がいたミッテラン
仕事より大臣評価は言葉尻
庶民とは縁なき官公労社党
反対のしにくい署名簿つき出され

大阪市　橋元美恵

貧しいが明日の話が出る食事
妻決してくどき文句を忘れない
背を向けて頼り合ってる親と子と
水割りの氷コトコト浸る愛

枚方市　稲葉星斗

交野山野行
わらび摘むただ松風を聞くばかり

京都田辺・天王村行
山里に牡丹育てて客を待ち
黒き瞳の乙女近づき牡丹画く
人行かぬ山家の庭に牡丹散る

貝塚市　行天千代

ポスターが旅の心をかき立てる
朝焼けに今日の命を預けよう
切り抜けて築く明日の夢が有る
口に出たあの一と言が身を責める

唐津市　浜本義美

連休のスリも忙わしいスケジュール
故郷の春の小川は生きていた

船帰る女口紅濃ゆくひき
行革も値上げも知らず花は咲き

唐津市　仁部四郎

宝くじはずれ善人高笑い
おそろしや彼は教科書だけを読む
定年に子の学年が追いつかぬ
富士山を招き入れたい青畳

橋本市　森脇善太

平行線交わることのない美学
雨漏りのリズム作詩を試みる
愛想の父とみぬいていた子供
ひと押しが足りずくやみを承知する

唐津市　田口虹汀

長考の囲碁に記録の目もだるい
鼻唄の出るほどほどの酔い心地
樹齢百年藤も感謝の色で咲き
飛びきれぬ風船今日の僕に似て

唐津市　木塚素石

窓開けて蠅追うて出すうららかさ
喜びを青畳にして客を待ち
石楠花と評判の娘に茶を貰い
梵鐘の温こう鳴る施餓鬼の日

唐津市　久保正敏

一線の向うに波紋が渦を巻く
わだかまり解けぬ褥の端と端
少年の心に残る窓がある
沈み行く石に波紋の責はない

羽咋市　三宅ろ亭

土手の路交わす挨拶靄は晴れ
畑仕事今出る山の陽に呼ばれ
一騒ぎあって老眼鏡が出る
毛嫌いをした犬覚えてて吠える

交野市　山本テルミ

ふるさとの春が宅急便でくる
居眠りをそっとしておく春ごたつ
三連休やすまず働くこいのぼり
長い冬に別れそよ風が春を呼ぶ

兵庫県　河原みのる

ユニオンジャック未だネルソンの血が騒ぐ
丹波高城山（一句）
丹波富士官林という枯れっぷり
余生どころかし残したこと多すぎて
いっそトコトン呆けて了えば倖ならん

大阪市　神田秀峰

男ならやると誓えば下がれない
宿替えに愛惜持った品も捨て
計算の通りに行かぬ世の仕組み
寄る年へ流行追わず同じ枠

三重県　坪田冬花

酒で消す悲しみなんかすぐに消え

過去みんな捨てて門出の顔になり
天国の父の良いとこばかり見え
酔うた時だけが煩悩消える時

生駒市　草深酔升

和えものに限ると褒めてコップ酒
爺ちゃんは叱らぬものと決めている
感謝する心に加茂の水清し
一念を貫き終えたほとけ顔

仙台市　川村映輝

郷土誌の中に亡父が生きていた
下戸へ酌ぐにも上戸は杯あふれさせ
犬に仕え親を粗末にする世相
赤旗を振れば組合から日当

唐津市　新岡回天子

静寂な中に紅黄咲き揃い
釣銭の新五百円おまけのように入れてくれ
ゲームして祖父が負けとく苦笑い
あの花も手入れがしたい煙の輪

高知県　赤川菊野

愛憎を抱いたまくらは不眠症
相性の悪い夫婦で子だくさん
一人居の誰はばからず夜を書く
一枚の葉書も来ない薄い縁

奈良市　森田カズエ

バイトから話題仕入れて妻かえる
演出家志望息子のベレー帽
変型の靴に個性をふと気づき
乾拭きで艶をだしたと老母の愚痴

和泉市　西岡洛酔

赤試着老妻女の火を残し
一日の灯男に職があり
夫婦連れ昨日は揉めた顔でなし
かたつむりの歩みでもよし日日好日

姫路市　大原葉香

感激の握手両手では足りず
宿の下駄プラスチックのもの許り
灯を消せば二人の話途切れそう
六十の坂が僕には険しすぎ

出雲市　園山多賀子

回帰線女還らぬ愛つなぐ
髪を梳く女に風花戯れる
囀りに慈眼の地蔵初夏の貌
つつじ咲く阿吽の狛犬苔に座し

岡山県　岩道博友

孤独の日我慢をいやす釣りニュース
聞き直す言葉はぶっきらぼうに言い
中流に育って近所をよくまとめ
笑わないくせが初孫見て崩れ

倉敷市　野田素身郎

試歩の道はやくも若葉薫る候

散髪もせず連休を蟄居する
降りそうな空元気ない鯉幟
結婚どころかうちの娘留年す

岸和田市　福島せつ子

母と又同じになった趣味の色
米寿まで生きると体調整える
一人住む弱さをペットだけが知る
車中から電話をかけるトップ記者

出雲市　吉岡きみえ

白足袋を白く洗って愛を断つ
幸せな夫婦に小さなくち喧嘩
ひとつひとつ善をかさねてゆく涅槃
酒量減ってわびしい夫の細い肩

出雲市　石倉芙佐子

もらい泣きしながら雨の音を聞く
迷い橋ゆれて渡れぬ向い岸
雨が好きなどと嘘つく白い花
人妻が妖しく映る彩硝子

出雲市　板垣夢酔

悲しみをすがって泣かす人がいず
銭狙う子が居て父が死ねずいる
蛸に愚弄飴には丸められる義歯
尾を振ってばかり戌どし生れです

高知県　松岡三吉

神前の誓い真っ赤な嘘ばかり
百人に訊く小遣いは皆足らぬ
鯉のぼりさてさて末は何人ぞ

大阪市　中西兼治郎

手応えが有ったと演壇おりて言い
編む妻と苦吟の僕で今日も暮れ
人力車映画村で見て帰り
お日様が屋根でわかした風呂に入り

大阪市　欄蘭

白旗を心にかかげ朝帰り
一流のホテルの前にラーメン屋
花見酒音頭取ってるのが社長
満開の花へ蜂が野暮に見え

寝屋川市　稲葉冬葉

ダスキンに負けぬ雑巾の意地っぱり
父の死に涙せぬ子に育てしや
雨しずくぽっつり恋う人を待つ

島根県　太田亀甲

若葉燃ゆ目で風鈴の音を聞く
小包の草餅母の愛を嗅ぐ
武者人形もう飾らない子に育ち

和歌山市　杉田周穂

魔のさした浮気に高い授業料
宝石が買えて家庭が崩れゆく
誰も持つ心の宝石磨かない

長野文庫

今日佳き日第一面に日章旗
景気風吹かせ下され神だのみ
ほっとけばいつか地球は空になる
損得を考えライバルと握手
歯車が一つ違っていてにがて

若柳潮花

花びらを浮べ湖底の水ねむる
男と女何の絆もないふたり
双親の知らぬところで風邪をひき
如雨露の雫が崩す蟻の列
折れるまで角突き合すのも女

尼緑之助

緑一色探すドラマも南椽
臨調へ打電がしたいニュース聴く
二人でも意見が違いふとだまる
忌はめぐる墨絵がひょいとのぞきこむ
信じきる耳に噂は風の音

月原宵明

約款にある逃げ道の小さい字
ガム噛んで女多情を恥とせず
エプロンの白喝采の惜しみなく
鋤鍬で稼いだ富は高が知れ
花冷えの頃に勇退説流れ

河村日満

入院の児が出で凋む春祭り
病院へ弁当運びの役がつき
自動車に便利な道で人が死に

愚妻の健康回復に

十年も病んでけろっととはいかぬ
青年の無職を不思議だと思い

本田恵二朗

記念樹が背丈を越した声がわり
浪花節みたいな義理がつきまとい
笛吹けば踊ってくれる良い仲間
一日一善折れ釘十本拾い当て
特級酒の効き目米寿がマイク取る

黒川紫香

二階から抜け毛を飛ばす不埒者
雲の峰ここも指定席がある
六甲の真下に住んで風に逢う
のそのそと出て雨雲を見る蛙
まっ直ぐにお行きやっしゃと京の道

正本水客

遠まわしに言うているのは知っている
拭きこんだ廊下に素足はばかられ
忘れものして来たように女いる
男どうしと或る日の父が思われる
竹藪を出外れてから犬走る

浜田久米雄

千円のベースが一万円になり
忘れたら思い出さないことにする
ふた月目ですと床屋へ言うておき
何万円とすらすら言うて来る時世
母の日のお下りものが届けられ

若本多久志

大観をすれば胸張って天仰ぐ
徹すれば人生語るものもなし
悲観する者首垂れて道を行く
金溜めるより散ずることの難かしさ
人生は哲学だ師の訓え今にして悟る

川柳太平記(50)

明治柳誌時代の開幕

東野大八

久良伎の「川柳梗概」は川柳史上注目すべき点火役を果たしたにちがいないが、明治期の川柳復興に、実質的に偉大な役割を果たしたのが新聞柳壇であった。

新聞柳壇のトップを切ったのは、日本新聞（明治36年）の新題柳樽（剣花坊選）で、つづいて電報新聞（明治37年）の新柳樽（のちに新風俗詩）久良岐選、東京日日（同）の狂句（三面子選）、読売新聞（明治38年）の瘤柳（朴念仁選）やまと新聞の新編川柳柳（駄六選）このあと明治三十九年には、国民新聞、毎日電報、万朝報、都新聞、中央新聞としめて東都有力新聞十紙が競って柳壇を設けた。

これらの新聞柳壇の常連投句者の増加につれ、次第に柳誌発行の気運が盛り上った。その選者を中心とした投句家との初の集会は明治三十七年六月五日で、九段の久良岐宅で開かれた。音頭とりは啞笊棒（のちの関口文象）だったが参集者たったの六人。しかし新川柳勃興初の集会として注目される。

これに刺戟されてその年十一月には、読売柳壇組が吾妻橋のビヤホールで会合をもったのをきっかけに、各新聞の柳壇育ちの人々が各集会をもち、ここから各派の専門柳誌の胎動がはじまり、明治柳誌の開花期を迎える。その第一号が「五月鯉」（主宰は久良岐）である。時に明治三十八年五月五日で、久良岐は「五月鯉」発刊と同時に新風俗詩と称した。

「新風俗詩は現社会の短詩なり。都会もしくは現社会の叙事、叙景、抒情の三詩をも抱有し、之に付帯せしむる自然の滑稽可笑味（但しオドケとフザケに非ず）婉曲なる諷刺（露骨毒口に非ず）を以てし、かねて新詠史と他の韻文との交渉、天然に交渉する新田園等をも作成せんとするものなり」（久良伎序文）

―イヨウ待ってましたと初桜　久良岐

「五月鯉」と同時に「下毛江」（浜口秋思ほか）が出たが、いわば「五月鯉」の屋上屋の観がある。この発刊に剣花坊派も黙っておれず、その年の十一月に「川柳」（柳樽寺派機関誌）を創刊する。序文に剣花坊は記す

「吾人は川柳の名を用う。然も必ずしも川柳の形式内容を悉く学ばんとするものにあらず、ただその長所をして益々助け長ぜしめ明治文壇に新式短詩を打ち樹てんとするに他ならず、絶対無上の滑稽詩を健全に発達せしめるに他ならず」

この剣花坊をうれしがらせたのは、「五月鯉」と同年の七月大阪から小島六厘坊の「新編柳樽」が出た。発行元は西柳樽寺とあり、剣花坊はこのことを日本新聞の柳壇に特記し大いに意気がってみせた。

この剣・岐両派の柳誌の出現に、読売派も黙ってはおれず、翌三十九年十一月に「川柳とへなぶり」（朴念仁主宰）を発刊した。読売

派は準俳句的写生吟がうりもので
—萩の径またぼんぼりが一つ見え　朴念仁
式のもので、格別に主義主張をもたなかった。柳誌時代の開幕は、まずはこの三社てい立で暫くつづいた。

この三柳誌の出現によって自ずと新分野をひらいたのが古川柳研究である。久良伎派はその「五月鯉」にその論稿や研究論文や雑文を載せたが、その筆者は卯木、花月、百樹、虹衣、幻怪坊、春雨などで、一方、剣花坊の「川柳」では角恋坊、飴ン坊、笑覚坊に剣花坊自らも、のちの「古川柳真随」の礎稿を執筆している。その「古川柳真随」とは

「よしや、その真随なればとて、我等革新川柳人に古川柳が何の交渉ありや、曰く大いに有り。我等は川柳を革新せんとするものなり。単に詩を革新せんとする者にあらず。古川柳を知らずして、いかでか川柳をあげつらうことを得ん。古川柳を知らんと欲せば古川柳の傑作を読まざるべからず、古川柳の真随に触れざる可からず—」

この一文を裏づけるように、東京日日の柳壇選者岡田三面子が、明治三十九年一月十五日の東日紙上に次の「川柳十則」を掲げた。

第一則　写実を旨とすべき事
第二則　バレ句をせざる事
第三則　新しき事物に目をつくべき事
第四則　天地間の森羅万象何でも題になる事
第五則　句の上に題の意味聞ゆべき事
第六則　古人の名句を頑味すべき事

川柳に教科書なし、活字本にて雑誌五月鯉や、川柳の中の評釈をはじめ藤波楽斉編「類題川柳名句選」島崎松琴編「分類評訳川柳名句選」内山出宝題編「古今狂句一万集」などはみな良き参考となるべし。ことに太華山人校訂の「川柳大全」上下二冊は、俳風柳樽三十編まで位の粋を抜ける「類題柳樽大全」という化身にして宝暦、安永、天明頃の名句これに尽く。古本は尚よし、手に入らずば借りても古人の声調を味いて、新しき工夫を凝らさざるべからず。借りたるは必ず返すべし。

第七則　俳句俳諧を参考とすべき事

一茶ばりの俳句は川柳のよき手本なり。俳諧の付け合にては「俳諧觿」「武玉川」などの句味うべし、今は容易く手にのらざるを恨みとす。たまに端本あり、逃さず買占めて珍とすべし。

第八則　披露は後日に廻すべき事
第九則　運座は当て気を慎むべき事
第十則　川柳を尊敬すべき事

この十則は初心者への指導原理であるわけだが、古川柳を知らぬことを得意とした作家は、川柳の本質が判っているはずはなく、革新を口にするなど以ての他「僕は古句を知らないから、古句と同句の僕の句があってもそれは僕の責任ではない」とは言語同断というわけだ。三面子の十則が出た遠因には、新聞柳壇にやたらと古川柳の投句が多い事だ。この選者泣かせの好例に、剣花坊の日本柳壇にこれがやたらと多く、古島一雄に叱責された事がある。また水府があすの番傘を担う側近に、古川柳の無痴を指摘し樽初篇の数句を挙げて見よと迫ったが、答えることが出来なかったのを大いに嘆いたという例もある。

新聞柳壇のほか、川柳のPRに絶大な偉力を示したのは、明治末年、大日本雄弁会講談社が、娯楽六大雑誌に懸賞大募集とめいうち多額の賞金をかけ、川柳を募集したが、一般の射倖心を煽る意味で問題があったものの、川柳の大衆化、社会化に貢献したことは見逃せない。川柳界が排斥運動を起した素文川柳漫画は、講談社専有の人気読物だった。

誹風柳多留廿六篇研究（七丁）

石田成佳・大屋六郎・八木敬一
鈴木　黄・石田晋一・南　得二
小野真孝・本多正範・多田　光
故岡田　甫

108　**栗の木の杭に是ヨリ丹波道**

石田成＝丹波地方は、日本で最も古い栗栽培の歴史を有する地方である。句意は、普通一般的には道しるべに石材が主として使われているが、さすが栗の名産地として有名な丹波の国への道標には栗の木の杭が用いられているというもの。

八木＝贅。

栗の花咲や是より丹波道　　ケイ三・93

多田＝右贅。

岡田＝同。今なお東京でも大きな栗を〈丹波栗〉と呼称するように丹波は栗の名産地、また栗材は杭などによく用いるからの連想。

109　**名は七ッあって女のかなめなし**

石田成＝七つの名は、小野小町一生中の事跡を語り伝えた七種の俗談で後に謡曲に取入れられ、それは草子洗小町、通小町、鸚鵡小町、卒塔婆小町、関寺小町、清水小町、高安小町、以上の七小町の名が起った。女の要は勿論女の穴の意で句意は草子洗小町以下七小町の名で謡曲にも取入れられているが、女としての肝心要の穴が無いとの意。

さりとてハ又おしい事穴がなし　　五九・13

穴もないくせに小町は恋歌なり

明かずの間へ少将は九十九夜　　安五宮2　二七・18

多田＝贅。

岡田＝同。

110　**面色筋をあらゝげて五両〆**

石田成＝面色筋を荒らげるは顔色を真赤にし青筋を立てて怒り絶頂に達した様。本句、美人局の句とするものと、間男の首代とするものと、二つにわかれている。確かに美人局の句とも想えるが、断定するには漠然としており、素直にはげしい怒りの姿を表わしたもの

として、間男とする方が無難と考える。

振上ヶた太刀の下タ御無用五両　三九・7

八木＝礎稿の「美人局」、「首代」どちらにもとれるが「〆」からして美人局としたい。

本多＝「〆」は「しむ(占む)」の活用形であろう。「自分のものにする、占有する」の意で、「せしめる」とは解し難い。従って、美人局の句とするより、間男と解すべきだ。

多田＝右同。

岡田＝美人局と考える。

111　**拠安ク売るなと枕紙にする**

石田成＝枕紙は木枕の上の小枕を髪油で汚れないように覆う紙で、通常は古手紙などの反古が使用された。又当時も引札配りという職業があって、大安売や開店披露のちらし広告を配布してまわった。本句はそのちらしを読み捨て序に枕紙に使ったというもの。

又一度手紙をひらく枕あて　二・14

くれの文まくらにあててうなされる　拾八・10

まくら紙江戸中くばるこふく店　安六仁3

南＝賛。

い、まくら紙だと文をむごくする　安四信3

ゆびをなめてハほふりこむ枕紙　三五・20

本多＝「安ク売る」から引札である。

多田＝賛。

岡田＝同。

112　**どこへ出してもはづかしい嬪を取り**

石田成＝「何処へ出しても恥づかしくない」の反語で、暮の嫁・持参金付の嫁を詠んだ句である。

持参嬪此下もなき器量也　四四・13

持参金鼻はあれども筋はなし　一八・25

人間にてはよもあらじ暮の嫁　四一・5

多田＝賛。

岡田＝同。

113　**泥へ棒うたせて元トの鞘へ入レ**

石田成＝泥へ棒を打つは、泥田を棒で打つという諺で、意味は益のない比喩。分別も差別もなくむやみなことをする意で、本の鞘へ収まるは夫の家を出た妻、主家を離れた奉公人などが再び元の身分にかえること、元通りにする意。

句意は、亭主の吉原通いの果てか妻君が家をとび出したが、仲人かだれかが所詮あの亭主の病いでは無駄骨となるやも知れぬが、妻君をつれ戻し一応落ち付かせては見たが……どうなることやらといったところ。

ちっとぬりそっとぬり後家元のさや　四三・4

せなか代になると泥田を棒でうち　四八・2

大屋＝「泥へ棒うたせ」とありますから、あとの方、つまり「むちゃくちゃに」の意味になると思います。なんでもいい、とにかく元の鞘にかえれ、というわけ。

本多＝確信はないが、不義を犯した妻を亭主がおれて元におさめるというのではないか。

又元のさやへ納て五両取り　四〇・4

ふく水をほんに返して五両取　五一・8

などの句と通ずると思う。

多田＝全く自信がないが、美人局と考えていた。

岡田＝こういう治定しがたい句を〈動く句〉という。「打たせて」「もとのさやへ入れ」の語句からして、小生も多田氏説と同じく美人局と解していた。

黒川紫香選

ひとりだけ悪人がいる民話
改札を出ると歩幅がみな違い
待伏のような気もする花便り
不自由な耳でなければなどと欲
春の地図中途で道が切れている

西宮市　片上明水

子がある日保険をいくらかけてるの
生前の父の植木が真っ盛り
中三がナウい笑いをもってくる
摘み草に疲れ野球を応援し
コーヒーを上手にいれてふたりきり

青森市　工藤蕗子

気の多い男にめしは浅く盛る
許す気の距離で女がついでくれ
筆談の余韻に愛が見えてくる

西宮市　紀市郁栄

鉢巻きがないと寿司屋は絵にならぬ
土曜日の午後に男の飢えがある

尼崎市　奥山美智子

むつましい夫婦で手相など見ない
張りつめた心ほぐれる誘惑で
気の許すままに独りの下り坂
椅子ひとつ男の地図が描かれる
タンポポからゴッホの炎をもろてくる

熊本市　有働芳仙

赤電話横からうまい嘘を呉れ
見え透いた嘘しかママにつけぬパパ
一病息災薬でだまし生き
アッパッパ着ると無邪気な線が出る
初恋のかけら拾いに独り旅

尼崎市　角野かず子

夾竹桃の白に心を問うてみる

稲妻に蚊張の暮らしをなつかしみ
ふり向いたあの日の風を待ち続け
丹精の花なら束ねたりしない
描いた絵が次の謀叛を考える

今治市　矢野佳雲

雛守るうちは白鳥泥まみれ
光りすぎるから造花と見破られ
真実がじっと判決待っている
また明日出直すつもり陽が沈む
一刀の冴え円空の仏たち

尼崎市　丹下玉子

点滴で命をつなぐたのみ綱
今もなおラッパが聞える父の耳
舟乗りがロマンの花を置く波止場
庭の花手紙にはさみ国便り
花時計待ついらだちを慰める

八尾市　高杉千歩

俎板のくぼみ母の愚痴もれる
新調の下駄箱夫の靴光る
徒食して朝夕ポスト散歩道
自立する息子に甘えてる母である
葉桜の雀と瞳があう昼餉どき

尼崎市　西村かすみ

主義主張ゆずらぬままで父の老い
リヤカーの野菜は朝の色で売れ
禁酒して男の覇気を見失い
灰皿もガラスに替えて初夏の客
週刊誌伏せてタバコや売ってくれ

松原市　本多洋子

病室の窓へ雀が見舞いに来
試歩一歩一歩新芽の庭に出る
ライバルが居るのか切ない猫の恋
一番乗りの燕見つけた朝の道
嘘と知りつつ女信じようとする

羽曳野市　麻野幽玄

テレビ料理見ながら茶漬の早い昼
老人を出不精にさす歩道橋
お仕事と言えば行かせて呉れる孫
偏食の家庭で猫も慣らされる
駐在所留守で鈴虫鳴いている

大阪市　野田君枝

利き酒へさすが枝雀はサマになる
散歩道変えると犬は座り込み
スト回避列島ほっと春景色
早春の緑眩しい雨あがり
ロボットは鉢巻もせずデモもせず

高槻市　竹内花代子

子の漫画雲にも眼鼻付けている
性格を無視して枯らす水をやり
六角堂柳は春の土を這う

天邪鬼桜は窓を覗き込み
善峰寺松は雲呼ぶ竜に見え

名古屋市　越村枯楠

足の爪切る女房は絵にならず
舞い納めいつか来る日の夫婦独楽
お布施出し忘れ僧は立ったり坐ったり
切り札を捨ててしまった一人旅

京都市　松川芳子

穴埋めがしたくて夜の蝶になる
旅楽し雲もスイスイついて来る
雪解けへ迎えて呉れた蕗のとう
旅の宿窓一杯に秋日和

兵庫県　中田白李

一秒の音にも不精髭が伸び
ポスターの通りの水着を見ず帰る
無事暮れた今日の日記は白でよし
誘惑に負けたい日もあり雨続く

富田林市　藤田泰子

お湯呑みの底で咲いてる桜漬
蓮華田の真中あたりに母が立つ
きぬさやの豆より小さい足の指
短針がすみれ色指す花時計

島根県　槻谷一葉

夫婦愛こんな美しい嘘がある
口べたへ少し早目の酒を出し
いいうんち出たとおむつを替えながら
雀にもお米をあげる墓参り

富山市　舟渡杏花

しあわせとかいた便りを書きなおす
商法のイロハをさとす四ツ玉
キッチンへ嫁の自信のレパートリー
焼酎の度などは知らずナポレオン

島根県　大浦ふみ

菜の花に夢さそわれて誘われて
葉ざくらが目先きを変えて訪れる
入学の親子迎える花吹雪
娘の眠る墓碑ふりかえり振り返り

兵庫県　森脇和子

手話二人月も笑って味方する
二日酔もう忘れてる指げんま
ノックする人それぞれの癖を持つ
一輪の椿茶席に満ち足りる

東予市　小山悠泉

蝶々のいたずら変な花が咲き
メルヘンの世界を駆ける子の童話
裏町でピエロは明日の策を練り
逆立ちをしようか胃下垂なおるなら

大阪市　大野武太

おいでやすいざ商戦へ五分前
イメージが重なる君の青春記

連休の宿から弾む娘の電話
マスコミの先生だからさからわず
尼崎市　田中晴子

くやしいと書く日が多くなる日記
箸紙に鈍い痛みのある記憶
琴線をはずみで鳴らす春の風
和紙を折る素直な心になりたくて
豊中市　満仲きく子

大根の花の素直ささりげなさ
飲めぬ酒飲んで言わせて貰います
れんげ田に少女スカートふくらませ
かたつむり歩く稽古をしてますか
尼崎市　伊藤春子

野すみれの紫いとし根づく庭
結び目を少しゆるめた旅の空
小さな喫茶店郷愁があり春の宵
ぬきんでた技もつ人の美しき
西宮市　奥田光子

幼子の如露に小さな虹が立つ
墨痕に亡父の指先生きている
熟年の妻にもあったたぎる血が
わらべ唄いつしか消えた鄙の里
鳥取県　武田照子

姑の柄少し派手目を心得る
半袖で異常気象の街に出る
母からの指輪節からもう抜けぬ
寝たきりへひと言入れる隙間あけ
尼崎市　関口幸子

仲直りしたいが相手帰らない
妻の座の指定席から下車できず
音楽会わかったような顔で聴き
お百度を踏んで前より悪くなり
島根県　東原福子

ジョギングの足が躍動初夏の風
新緑を伝って落ちる雨の彩
長尻の客へチラリと時計見る
ボロボロになって風格保っている
境港市　細木歳栄

野いばらの向うをのぞいて見たい気も
丹精の鉢が姿を消して朝
アンテナの谷間で鯉が小さくなり
裏切られ裏切られ人間まるくなり
島根県　石飛水煙

底辺を生き抜く世相へ妻と子と
殺しては儲けて河豚の慰霊祭
どないにもならぬから強盗おもいたち
生き生きと妻菜園に日を過ごす
西宮市　朝山千世子

病みあがり殊に瞳を惹く松の芯
初恋をしのぶ余生の句が若い
クイズで稼ぐ子持ちの母の瞳が光る
母の日も嫁無関心の味けなさ

ストレスを捨てるコーヒー甘口に
転た寝の夫に聞かれた独り言
トータルへ不安な瞳市場篭
いつのまか減塩食に慣らされる

水戸市　上鈴木春枝

もしもしへ用のないのもこっちむく
ごめんなさいてるてる坊主しょげ切って
私には故郷の山河も名所です
情なや往きも帰りも向い風

大洲市　米沢暁明

奥様が乗り気とセールスマン去らず
新聞で覚えた料理をほめられる
バーゲンで一寸派手目な服を買い
カーネーション老母に贈って娘に貰い

大阪市　板東倫子

これしきのことでは揺がぬ父の膝
石の音さえざえ響く無口の碁
一粒の金平糖にひそむ夢
新築の床ひきしめる能人形

西宮市　藤村宏子

近道を知った男の歩が変る
故郷の味母の味かも蕗のとう
許してる腹が素直に出ない口
肩書を捨てた男の丸い肩

大阪市　吐田公一

春の午後蜂一匹が騒がせる
一年生机をなぜてうれしがり
停電へ信号だけが灯ってる
雨降りに嫁入り荷物街をゆく

尼崎市　矢萩貞子

浅学な父辞書ばかり買わされる
連休の疲れ家計簿考える
夫唱婦随妻の肩もつ子が二人
母の日の膳もやっぱり母が盛る

今治市　渡辺南奉

もう止めといわんばかりに鼻毛抜き
寺ばかり訪ねて京の旅果つる
金婚の旅のプランへ子等集い
春一番駄馬も走ってみたくなる

岡山県　吉末謹太郎

悲喜こもごもみんな流れて過ぎてゆく
良き師良き友あってペン投げず
土砂降りの雨にたたかれまよい断つ
ひと言が多くて善意通じない

尼崎市　中辻千子

花に止ったばかりに虫も殺される
風に乗り園児の歌が飛んで来る
連休に法事がてらの里帰り
見たい夢枕に願いかけて寝る

西宮市　西口いわを

空想をわたしひとりのパノラマで

堺市　久井富子

淡白なこころ豊かな乳房抱き
真実を語るに涙ついてくる
ペットショップ値切る間も眠る犬

尼崎市　中谷利美

前例がないと作ろとせぬ役所
断りの電話きれいな嘘を選り
トイレから食い逃げ出来る梅田地下
失業の目にうらやまし天下り

旭川市　朝倉大柏

両足を支えるだけでよい大地
師の影も踏まねば男とはなれず
救いようなく現実と夢の距離
笑ってるようにも見える白寿の瞳

枚方市　二宮山久

葉桜になって見向きもしない寺
本番で泣かれて司会者こまりはて
石仏だけは昔のままの村
愛の巣もそろそろ狭くなる小部屋

尾鷲市　渡辺伊津志

本物の芸は温か味がにじみ
わが舞を被露している白い濤
人の目の高さで歩くカメラの眼
摺り足で嫌悪の情が寄せて来る

岡山県　松本元江

紫の雫をたらす藤の房
食べたい時食べて一人の気の安さ
電柱の鳶も呆れる機械植え
減反を強いられ米を買う農夫

今治市　新居田胡頽子

散策のリズムが弾む青葉風
渦潮へときめく夢の本四橋
ひとり旅ロマンくすぐる風に逢い
絶景を両掌に掬う深呼吸

高知県　曽我部つぎお

タクシーの無言不気味になって来る
何一つ持技とてない作業服
相手にはちょっと不足にされる酒

大阪市　藤森小雅子

違い棚男のエゴが並んでる
陽炎の中の乳房は燃えている
脱サラの異端は山で炭を焼く

大阪市　北山悟郎

五月晴れおむつとおむつからみ合い
白ナンバー犬一匹だけ乗せて居り
内弁慶の顔並んでる幼稚園

山口県　高崎雀声

ふり返る道はじぐざぐ荒れている
老眼鏡かければ庭に花が散る
風雪に耐えたガラス戸締まらない

島根県　松本はるみ

甘栗のポコリとむける花むしろ
ためし切り若いキャベツの喉ぼとけ

底なしのダムに笹舟たちすくみ
米子市　足立由美子

おいしいの一言主婦に自信くれ
親切のつもりの世話をうるさがり
写真から満心の笑みこぼれそう
岡山県　石黒若恵

企みの酒にまんまとしゃべらされ
娘の助手で炊事の母が楽しげに
何時何処で聞いても和む寺の鐘
弘前市　田中叶

人事異動その日も子等の馬となり
髪染めた他はいうことない女
犬もみた此の頃派手な奥様を
島根県　星野侑正

口論のもとは一言多い母
脱税のうまい企業で主座につき
無医村は軒に薬草吊って乾し
熊本市　北川一進

ブリッコもつっぱり嫁にちゃんと行き
路地裏を市電もあえぐ古い道
メリケン粉顔一杯に子の料理
大阪市　堀口欣一

ふるさとの春白い花赤い花
春の雨敦賀の町は久しぶり
東京の孤独たのしむ三日旅
岐阜市　市川鱗魚

出勤簿働き蜂が閙の声
明日のあるコップ話題と茜雲
鼻の汗なぐさめられる子に笑い
大阪市　日阪秋子

変るはず無いのに寡婦の目で見られ
五月雨がことさら走る石の坂
大阪にこんな慕情の口縄坂
八尾市　山下みつる

複雑な駅で乗り場に迷い果て
ハネムーンメニュー通りに動かされ
入学式へ腕白かしこまり
河内長野市　糸谷春草

逞しい海の男の爪を見る
新聞の今日の運勢欄を見る
どっと出る新刊買いたいものはなし
大阪市　朝倉利義

休刊日朝のリズムがちと乱れ
乗り気ない見合いでも行く美容室
年金にすがって生甲斐見うしない
八尾市　松下蕉露

マンションに犬と燕を飼うマダム
淋しい夜影法師だけついて来る
誘惑の軟かい手に摑まれる
熊本市　高野宵草

腕の犬可愛い声で虚勢張る
火葬場ではしゃぐ孫等に風薫る

べんちゃらが言えず出世をあきらめる
岡山県　池田半仙

野良猫は逃げても一度振り返り
仲人は十八番の泥鰌掬いする
水溜りわざと園児のズック靴
鳥取県　羽津川公乃

腕白の夢は宇宙をかけめぐる
カラフルな鯉が忘れた滝のぼり
温室に咲いて自然を軽く見る
唐津市　神崎紫泉

学識を鼻にかけすぎ嫁き遅れ
来て嬉し帰ってうれし孫と嫁
ドブ川もカメラで見れば風情あり
岸和田市　吉水照江

おだてにはのらないつもりがまたのった
年寄りはヨモギを見れば摘みたがる
くたびれた足をほぐして薬風呂
大阪市　津山刀水

表札に父がしがみついている
息の合う夫婦で喋らなくてよい
本物の五千円札までうたがわれ
島根県　北川民子

亡母恋う小路に萩の咲きこぼれ
新婚の嫁のピアノにそっと触れ
発つ人が言葉にならぬ握手ぜめ
八尾市　宮崎シマ子

田の母へ速達郵便持って行き
目印の松が枯れてた里の山
母さんの頼る長姉がまず背き
大阪市　今西静子

言うだけは言うて波紋の中にいる
地方紙の記事がなじめぬ旅の宿
マイホームに夫婦共ども乗り気ない
岡山市　原田凡太郎

老人と妊婦が席を譲り合い
プロポーズ港の見える丘に来て
お小言のない日はないで案じられ
竹原市　佐藤令子

球根を土に返せば花をつけ
ランドセル一段落という重さ
善人でも悪人でもないくしゃみ
兵庫県　野々口ゆう也

ひとり居の闇深くする渋いお茶
女いま闘い終えて花撰び
鏡には写らぬ人柄句ににじむ
大阪市　横井冨久子

日曜日網戸洗って夏を待ち
五月晴風呂場のペンキまでも塗り
網棚の新聞とって席探す
川西市　氏林洋敏

夏むきの家がいいなと夏思う
腸ガンの疑い晴れて寝こむなり

母の日の母は子供のこと思い
兵庫県　奥野テル

倖せは茶碗が並ぶ古稀と喜寿
巡る四季花それぞれの彩に咲き
ゲートボール嫁審判の老夫婦
諫早市　江副二牛

国なまり聞く郷愁の上野駅
親と子と飲んで意見はくい違い
難題へ思案の煙草まだ続き
高知市　北川竹萌

新しい帽子並んでお茶を摘み
よく晴れてここのお家もお茶を煎り
仲よしが犬の散歩へ声かける
千葉県　中村有人

深呼吸すると素晴らしい山が見え
夫婦してゲームをすれば夜が更ける
若者の欲求ドラム叩いてる
大阪市　平井露芳

離婚記事庶民は誰も驚かず
大阪に住まず大阪愛してま
釣るだけが楽しみ魚食べられず
唐津市　山下勝一

悲しみに耐えて紅ひく寡婦となり
善人が譲った席は温かい
余生尚肩書ほこる愚かなり
島根県　藤原秀穂

国体に一役サルビア戸毎咲く
免許証持たない意地がひた歩く
見えすいた嘘でも美女なら信じよう
尼崎市　山田保蔵

つまずいた石がまだある元の場所
届け出をすませて帰る軽い足
勉強の出来ない割によい机
愛知県　国分甲子郎

おなじもの着ても育ちの名古屋帯
譲られたシルバーシートでまた譲る
入替えの着替慌しく四季めぐる
高槻市　芦田静江

雨上り蛙も見ている花菖蒲
釣り橋のスリルに声がこだまする
老人センターにて
余白埋め希望の虹が沸く憩い
鳴門市　八木芳水

停留所噂話が流れ込む
成り行きにまかせて歩む老いの坂
年の功説得力も板につき
青森県　荒田つる

心にもない妥協してねむられず
脈あると知ってて女も見逃さず
足音に話題を変える立ちばなし
青森県　波　ただお

今日もまた息子は無事に帰宅する

短冊へ正座して書く墨匂う
五月晴れ心の窓も明けようよ
和歌山県　寺田裕美
根まわしがよくて改選あっけなし
ファインプレーへきらりと光る背番号
冷汗を嫁の機転にぬぐわれる
島根県　岩佐富子
留守番は孫と二人の米をとぐ
年金で生きる余生の細いみち
鯉のぼり大きくなったなと抱きあげて
大和郡山市　岡田すみれ
老いの身も山菜採りに若返り
待ち兼ねたピンクの春はす桃から
雪解けでわさびの花も生き生きと
尼崎市　荻野江唯夫
抱きよせた妻の体の柔かき
砂に書く愛の字今日は燃えて見え
沖に真帆入江に夏風吹いている
河内長野市　井上伸子
夏間近かつつじの道をペダル踏む
古い家隠して伸びる青い蔦
小鳥可愛がれば犬が庭で妬き
東大阪市　高木コハギ
辻地蔵たれがあげたかふくろ菓子
名もしれぬ木に絡み咲く山の藤
軒下に同じ花咲く両隣り
大阪市　大倉圭介
やっと勝つ阪神トップ記事になり
偏向の流れにコラム舵をとる
冷蔵庫いっぱいつめて料理下手
島根県　田中ヒデ子
兄危篤
リンゲルだけが頼りの夜が白み
浅漬けも出来ないままの別居とは
寝台車受彰の喜びかみしめて
大阪市　塩田新一郎
文明が進み不安もまた進み
涙顔のままで寛美は笑わせる
振り逃げでホームに帰る人も居る
八戸市　島田昭治
背を流す子のバカ力に顔ゆがめ
妻の留守うるさくないが物足りず
横断に停まった車に会釈する
島根県　藤原鈴江
チョコレート供え亡夫へ手を合せ
新調の服を鏡が離さない
羨望の的で倖せ薄き女
大阪市　山本炉斉
乗り気ですローンで建てる新家庭
春陽へ老いを忘れたジョギング
スポーツ紙で老いの血汐を湧きたたせ
鳥取県　和井観洋

花五月美人がこちらへやってくる
吹田市　西岡豊

花よりも子供ラーメン喰いたがり
大きめのマスクで虫も殺さない

九十の恩師饗鑾クラス会
六十の個性漂うクラス会
東大阪市　三宅旭

手拍子は勝手にやらせ注ぎ回る
数世紀前の政策だが革新
貧すれば難題言ったりダ捕したり
富田林市　田形美緒

歯医者にもうっかり行けぬ世とはなり
工事場の父の兜は安全マーク
堺市　田辺哲寿

塀越した枝が隣りとまずくなる
化粧台ずらり並んだ男性用
守口市　中原好恵

店員に付きまとわれて買わず出る
高速路夜は都会のネックレス
大和高田市　岸本豊平次

どうとでも取れる言葉で占い師
こじつけで名所になった岩もあり
島根県　福間芳枝

味噌汁もパンにも飽きて朝を抜き
花曇り今日は黄砂という予報
お愛想に笑ってやればよくしゃべり

生きざまの綻び繕う仕舞風呂
島根県　岩田三和

根まわしのうまさ男の政治力
山つづるいろんな小路知るガイド
大阪市　山脇正之

ぼろ着ても村は決して見すてない
間食になる程貰う飲み薬
高知県　山下登舟

褒められてその気になったアクセサリー
朝掘の筍持って友を訪う
大阪市　泉田そとゑ

ひと眠り覚めて老妻愚痴になり
啓蟄で出て来た蟻を指に押し
青森県　岩淵一星

民踊の輪に入り踊る花吹雪
妻に言わせれば良くない友ばかり
高知県　藤原岩男

六十路まだまだ登りだけ続く
乗りすぎた言葉の後をくやまれる
大阪市　高田大介

母のない子供がえがく亡母の顔
猫好きの目に犬は尾を振り過ぎる
泉佐野市　大工静子

飛行機が嫌いで社長勤まらず
五年ぶりの友
友の手のぬくみ持たずして帰り

シャボテンの一途な趣味で陰気性
奈良県　宮川古都路

分譲へ値上りを待つ雑草地
傷を持つ心が重い村を出る
唐津市　筒井朴竜

ブリッコな鮎　友釣りへ先ず掛かり
釣キチの乗降忙し「鮎帰る」（バス停の名称）
大阪市　権安達一郎

看板屋ヌード画くのに念を入れ
気のりせぬ集いにも出て義理果す
倉吉市　今村夕路

ある時は公園見合いの場所にされ
雅号だけ知って本名まだ知らず
兵庫県　藤原捷一

外灯をぼかしてにげる通り雨
正確な時計を持って気にゆとり
今治市　八塚三五島

スーパーに来ると女が生きてくる
セクシーな女隣に来て煙草
唐津市　浜本千代

欲しくない齢いただいて祝われる
女もう女の特権要らぬ老い
東大阪市　金本不二夫

母となる心の準備母に聞く
丸顔がよいと写真をみせられる
兵庫県　円増貞子

ほろ酔いの夫をささえる妻の影
京訛りすっかり板に孫が来る
新潟県　高野不二

歴史は繰り返すかモンペはやり出し
子と呑める酒がそんなに嬉しいか
大阪市　服部頼一

陽春に芽吹く盆栽孫に似て
妻の注ぐ酒には愚痴が付いて来る
八尾市　椎尾公子

帯上げの色に合う帯あててみる
城跡に燃えるものあり山紅葉
今治市　蔦本昌道

夫似の短所にふれる子を叱り
訥弁のぽつりぽつりと自己主張
東大阪市　米田喜一郎

錦着て帰る駅あり母は居ず
献茶会二つ目を着て椅子にかけ
大阪市　山田妙子

プロペラ機覚悟を決めたら眠うなる
故里の素朴さ消してゆくトラクター
橿原市　西本保夫

本当の親友と別れる日の定年
定年になれば書きたい事もある
守口市　長谷川司

最高の晴着で踊る春の蝶
三十石舟の乗場と碑が残る

句評リレー

小砂白汀（島根県）
越智一水（今治市）
三井酔夢（香川県）
水粉千翁（倉敷市）

雨だれの一つを飲んだ雨がえる

（那須鎮彦）

白汀―「雨がえるが雨を飲む」はいささか常套的である。この句の焦点は「一つを飲んだ」にある。そしてその主張は雨がえるにさえも無数の雨だれの中の一つを選ぶ自由と個が個を好み、あるいは嫌う、出会いとすれ違いの縁の不思議を素朴に表現されたようだ。

一水―白汀氏が言われる通り「一つを飲んだ」で、この句の魅力を引きつけている。つまり一茶が、人間を虫や小動物にたとえ、無言の叛骨を詠みこんだ俳句のように、風刺的詩としても受けとめられる。

酔夢―川柳と御無沙汰勝ちのせいか、すごく新鮮な感じ。鳥獣戯画のおどけた蛙が私の中で跳躍して消えた。蛙（人間）の意志にかかわらず、人生のある日の偶然、驚き、ひらき直りと見たい。

千翁―お三方共に、この句の一番大切なところをよく解明されておられるようで、この上は駄弁と思う。しかし〝雨だれの一つ〟はテクニック過剰のようでもある。酔夢さんの最後の評〝人生のある日の偶然、驚き、ひらき直り〟に共感する。

白汀―川柳塔五月号の巻頭の巻頭句としてこの句があげられて（句評を一水さんへ送ったのは4月16日）、もう一度読み返して見た。酔夢さんは新鮮と感じられ、私は常套的と言う。酔夢さんは多分内容のことを言われ、私はその手法のことを言っているので、この句のパターンは何十度と見ているので、この辺が食い違ったようだが、同じパターンはなるべく避けたいと思っている。

一水―この句自体が、あくまで創作なのかそれとも酔夢さんの言われる、人生のある日の偶然なる写生句なのか、想像を逞しくさせるところに、この句の生命がある。面白い良句だといえる。

酔夢―このところ各柳誌積読で、巻頭句とは知りませんでした。白汀さんの同じパターン云々は「○○の一つを…」を指摘されたと思いますが、この句の場合、私にはすんなりと入って来たのです。蛙が雨だれを飲むのかどうか知りませんが、単なる写生句なら子供の絵日記、いろいろ深読みさせて、作者は案外けろりとしているのではないかしら、ともあれこの雨がえるはその他大勢の庶民の顔でせんじ詰めればベーソスかな？

千翁―読み直してゆくうちに判り過ぎた句に思えたり、幾ら考えても判らなくなる句だとも思う。省略文学的に見ての可否から言うと、前に言ったように〝雨だれの一つ〟に引

っかかる。句評とは難かしいことを知らされる。

半分の血に叛かれる混血児

（川口弘生）

白汀―混血児の悲痛な心はその身にならねば本当に理解することが出来ない。その痛みをヒューマニズムの温かい目で捕えた巧みな句である。男よ女よそして文化人と自認する方々よ、人類に国境は無いなどと軽々しく思い込んだり高言するものではない。

一水―生れてくる児には罪はない。この句の場合「叛かれる」とあるから、戦争による混血児であろう。今こそ平和のために、川柳を大衆のものにしなくてはならない。

酔夢―知人の息子がハーフと恋をした。まさしく半分の血に叛かれたケンケンガクガクの渦中を見た。叛かれても強く生きよと句主の眼は温かいと信じて、一見非情に思える句を考えてみたい。

千翁―評とは一致性がないことが多い。評者それぞれが違うということである。特に憶測が軌道を外れてまで深部を抉ろうとするこ

ともある。〝半分の血に叛かれる〟という表現は悪くはないが、句全体から感じられることは説明的に終っているということである。

白汀―説明に終っている、と言われる千翁さんの説はごもっともで、それは「半分の」にある。ハーフ、イコール半分、こうなっては身もフタもない、だがこの句の場合それが何んとなくおかしいのである。悲惨な運命を背負って一生を歩かねばならぬ彼等にせめてユーモアを。

一水―千翁、白汀氏の説にわたしも同感だ。今、一歩、上五を考えて、生活の糧になる、何んとか句にしたいものである。

酔夢―思いはわかるのですが、句主の愛が充分に表現されず、些か観念的かな？　私には下五の「混血児」が安易に思えるのです。余談になりますが、活字になった作品とは孤独なもの、満場一致の拍手も空しい時がありひとりの共感に満たされることもあり、とにかく難しいものですね。

千翁―お三方の評それぞれに同感である。この句が自からの実感からの声であるならば句の巧拙を言う前に、評者は何おか言わんやで、評の範囲外であって、正に悲痛であろう。ただ客観的であるならば句全体が弱いと思う。

他人さんに決めてもらった齢でいる

（神夏磯　道子）

白汀―一見みのがしてしまいそうな句である。人間は特に女は齢より若く言って貰いたい人類で、セールスさん達はよくこの手を使う。お世辞もあろうし、おちょくりもあろうし、皮肉も。当人は万事承知の上でその手に乗ったような顔で応対、まことに人生の達人で、一枚も二枚も上である。

一水―下五の「齢でいる」が、この句を、いやがうえにももり上げている。人生を作者のようにおおらかに生きたいものである。作者の顔と姿までが想像出来る。

酔夢―年輪を重ねた女は、自分だけの齢を持っている。肯定も否定もしないでにっこり笑う。さらりと読んでいいじゃありませんか。

千翁―実にうまい句だと思う。特にその表現の軽さに脱帽したい。そして川柳的な重味があるのを見逃せない。座五の〝齢でいる〟がよい。

白汀―皆さん共まことに結構な作品と賞め

ておられるので、句主は案外不満かも知れないので一つ欲を言わして貰いましょう、というのは読者を苦しめる素因をちょっぴり添加して頂きたいと思うのですが、欲が過ぎますか。

一水―この句の場合、軽く読ませて、じんわりと考えさせる教訓があるから好きだ。そして軽く頷かせるからよい。

酔夢―句主にはきっと柳に風の年輪があるのでしょう。私ならはっきりと自分の齢を言います。千翁さんの言われる「表現の軽さ」を学びたいものです。

千翁―白汀さんの〝川柳は読者を苦しめる素因を添加せよ〟とは至言である。しかしやはりこの句全体から言ってうまい句だと思う。特に鑑賞者側から、前言の白汀さんの言われる〝一見見逃がしそうな句である〟ことを充分銘すべきであろう。そんな軽さを尊重したい。

人の句を嚙むように餅食べてみる

（渡辺菩句）

白汀―「嚙むように」がちょっと気になりまた安易すぎるようにも思えるが、句の流れからするとこうするより仕方なかろう。若い時には嚙まずに呑み込んだ餅だが、老いた今はうっかり呑むと命とりだ。人の句もゆっくり味わって読めば教えられることばかりである。

一水―ふつう餅を食べる句には、入歯とか餅の数とかでよく作句されるが、この句の場合「人の句」と餅の結びつけに成功しているものの、リズム感に不自然さを少しおぼえる。

酔夢―昔ながらの手作りの餅で、嚙めば嚙む程味のある人の句と解すべきか、カチカチの餅を食べて難解句と対峙しているのか、人の句と餅のつながりが、どうもすっきりとしないのですが……。

千翁―動かない句は何百句の中の幾らかに過ぎないことはよく判るが、この句の〝人の句を嚙む〟と〝餅食べてみる〟は共に動き過ぎる表現であって、ただ単におもしろい表現だなとして片付けては危険である。

白汀―一水さんの言われるように、もう少し手を入れて見たい句であり、千翁さんの、「このままで置いては危険な句である」もその通りと思う。まことに食べ難い餅を出されたようだ。

一水―正直言って面白いようで、面白くない句だ。

酔夢―人の句と餅のつながりは、単なる思いつきなのか、この発想は私には苦手、しめくくりの千翁さんに逃げこむことにします。

千翁―私のひとり言としてお許し願いたいが、やはり表現過剰と思えてならない。

青い実にしかと続いている未来

（松原寿子）

白汀―この作者の作品にはこんな型が多く新傾向の追及姿勢は大いに多とし今後が楽しみだ。が、この句は案外平板で「青い実に未来が続く」との構成は底が割れてしまっていて稚い。もう一歩も二歩も掘り下げて貰いたい。

一水―文学をかじっている女性作家に、近年、詩的傾向の句が多い。川柳本来の叫び、訴えを取り入れた詩的川柳は少ない。したがって、この句の場合「青い実」と「続いている未来」に作者の思想がもりこまれているのであれば成功だと思う。

酔夢―青い実に未来を夢見るのは女のやさしさか。もっと具象化した未来が欲しい。

千翁―〝青い実〟なるが故に続く未来の大

きさと広さがある。お三方のご批判は少しきびしいようであるが、表現と余韻を兼ね備えた佳句であると思う。

白汀―千翁さんが佳句とされたのには筆外にも相当の理由あってのことと思うが、私もそう評価してあげたい。しかもこの人が川柳塔賞受賞者で、また島根出身と聞くと尚更らだが、「しかと続いている」という中七がいかにも観念的である。これはあくまでも願望であって決定ではなく現実はどう展開するか未知の筈である。即ち「続くかも知れぬのである」魅力ある可能性を秘めた人だからこそこう言ってあげたいのです。

一水―酔夢さんが、もっと具象化した未来が欲しいと言われ、白汀氏が「しかと続いている」という中七がいかにも観念的であると言われている。結局、この句の場合、何かに結びつければ、指摘されている点が解消されると思う。このままの詩的川柳であれば、小手先の句となり、思想がないため胸をえぐるものがない。

酔夢―句主はお若くて有望な方とのこと、それ故に「少しきびしい」と言われる千翁さんに反論することになりますが、「青い実」が「未来」に続くのは常識的、このネガをうまく焼き付けて欲しい。詩的川柳云々のお話も出ていますが、詩は説明されて納得するものではないし、白汀さんの「案外平板」一水さんの「胸をえぐるものがない」に同感します。長い間、老人の看病が続いている私ですから詩を受け止めるアンテナがさびているのかとも思って見ましたが、いいものをお持ちだから、言うは易しと思って頂きたい。

千翁―この作者が川柳塔賞の受賞者であることは実は忘れていた。白汀さんの〝しかと〟の観念的。一水さんの〝小手先の句〟。酔夢さんの〝案外平板〟〝胸をえぐるものがない〟の同感。など私にはすべて納得行かない。一見説明的のように見られるが、この句にはこの句としての姿と心が備わっていると思う。特にその〝訴え〟の表現が立派である。それならば余情はどうかと言えば、この句を再読することによって、それも充分果されていると思う。

抵当は大学生の息子です

（山　本　規不風）

白汀―誰しも抵当に入れるだけの価値ある息子が持ちたい、だが落ちこぼれ息子ではこうはいかない、とも取れるし、猫も杓子も息子を大学へ上げる日本社会の構造、風潮の欠陥をするどく衝いた、それぞれに耳の痛い句である。

一水―現代社会が生んだ矛盾にメスを入れた句であるが、下五の「息子です」の「です」が気になる関係か、感動がわいてこない。

酔夢―爪に火をともして共稼ぎ、親はせっせと子に貢ぐ。無理算段の入学金も親の夢あらばこそ。抵当に価する大学生の息子は幾人ぞと百も承知の上で、うちの息子に限ってとの祈りかな？　とにかくこの句面白い。

千翁―それが大学生であるだけにきびしさを感じる。一水さんの〝です〟のご批判は私はむしろ句を強烈にしていると思う。〝です〟という平易な常用語からこそ親の真情がうかがわれるようである。

白汀―「です」が問題のようですが、私はあまり気になりません。いっそこれを外して見たらもっとすっきりしませんか、また「抵当は入ったばかりの大学生」とやればもっと切実感が出るような気もしますが、どうでしょう、面白いですね。

一水―初回「です」が気になると言ったがこだわってはいない。千翁氏の説も理解しているが、白汀氏が一言ふれている切実感があ

る句にしたいものである。

酔夢―偏見的に言わしてもらいますが、家業を継ぐために何千万の入学金を積む、これが銀行借入金だとすれば、まさしく息子は抵当物件、現代のオカシナ風潮に一矢を報いたと解したい。第三者の側からの風刺と見たい。平易な言葉でうまくまとめていると思います。

千翁―この句が実感としての作者のひとり言であればこれで結構鮮烈さがある。この句はこれでいいのではないかと言うのを評としたい。

三月十日何かの記念日だったっけ

（大矢十郎）

白汀―時事吟として当局へ差し上げたい句で、反戦思想もこんな形でふんわりとお目にかければ、案外じっくりと受け取ってくれるかも知れないと思うのは実は甘ちょろい考えで、外圧内圧、日々に軍靴の音が増幅されて来る風向きを何んとか、かわす手だては無いものかと、ゴマメが歯ぎしりしている。

一水―五十の坂を越している人間であれば三月十日が何の記念日であったかはみんな知っている。この作者は、その日が陸軍記念日であるということは知っておりながら、下五で「だったっけ」と、とぼけている。そのところが作者の腕前かも知れない。

酔夢―毎年、終戦記念日のTVが若者にマイクを、今日は何の日か知っていますか？と。知らない、関係ないよのきまり文句。余儀なく生きた軍国主義であろうとも、一つの青春があった。兵隊さんが通り過ぎると汗と油の匂いが残ったおとぎ話にも青春があった。作者のおとぼけには、憤まんやる方ないものが一ぱいある男の句ですね。

千翁―〝だったっけ〟に穿つものを感ずると共に、何かへのレジスタンスのようなものを見逃せないと思う。

白汀―35歳の時、三人の幼な児と一つの命を妻の腹中に残して、いきなり赤紙一枚で大陸へ持って行かれた初年兵（私）は地獄を這いずり回った、そこには酔夢さんの言われるような、メルヘンや、青春という語は無かったのです。人間の否定が原則で、一箇の物件として取り扱われたのです。記憶を辿ると腹わたが煮えくりかえる。「記念日だったっけ」ではどうにも我慢ができないのです。ああ！もっと強烈な言葉が欲しい。こんな苦汁を持つ吾々に、若者の「関係ないよのきまり文句」（酔夢さん）、「何かへのレジスタンス」（千翁さん）、忘れられてゆく戦中派のせいいっぱいのレジスタンスとも受けとれる。

一水―白汀氏の「記念日だったっけ」ではどうにも我慢ができない、強烈な言葉が欲しい、と言われる気持はわかるが、この句の場合は、初回にもふれたが、下五の音調子が何んとも言えなく良い。文句なし成功の句と思う。

酔夢―白汀さん、怒らないで下さいよ。戦争を知らない若者は、結婚記念日を忘れていた男の呟きだろうと言うのです。我々は、いろんなかたちで悪夢を持っているわけで、句主にしてもそうだと思います。「だったっけ」に長い歳月と世相へのアイロニーを感じています。

千翁―やはり白汀さんの迫真の訴えが身に沁みる。それはとにかく、省略文学としての叙法の成功はこの句を重く評価いたしたい。

お三方の作品評を通じて創作へのよき糧を得たと思う。教えられることを大切にいたしたい。川柳塔誌をめくる上で、この企画は楽しみの一つである。編集スタッフに敬意を表したい。

秀句鑑賞

—同人吟—

—前月号から—

河村日満

故郷へ帰る仮面を買うて来る

赤川菊野

久し振りで帰る故郷へ、人はやはり平素の己れより少し、いや大いに見栄張ったものを持って帰りたいものだ。中七の「仮面」にもろもろのものを感じさせてくれる。

引き出しをなんべんも抜く物忘れ

金井文秋

中七の「なんべんも」に、同じ年頃の心をゆするものがある。

オートメでぱったぱったと診察し

仲どんたく

私もこの〝ぱったぱった〟を検診車でよくやって貰う口だが、不安が残りますね。し止めに難はないかだが。

似たような夫婦に出逢う春の旅

小出智子

旅に出ることが多くなった日本人に、春はやはり一番いい季節であろう。

春なれや双の乳房をもちあげん

村上田鶴子

これはまた勇ましい。若い女性を想像すれば、更に楽しいではないか。

裏返す言葉を一つ用意する

藤村〆女

〆女さんにして、この言葉が用意されているのであろう。私も酔っていて、裏返されたことがある。

気どっても大阪弁が出てしまう

妹尾春江

私の耳に大阪弁は非常にやさしく聞える。大阪に育った者のみが持つ特権を、もっともっと誇ってほしい。

子を叱る言葉のトゲを抜いておく

岩本雀踊子

私と雀踊子さんとの違いは、中七の「を」と「は」であろう。ベテランの手法をよく覚えておこう。

妻よりも母でいる日が多くなる

島崎冨志子

男では到底作れる句ではない。女性の苦労はこんなところにもあることを忘れてはなるまい。

十円を上手にしゃべる赤電話

桑原伊都

中七でうまく生かされた。こんな女性ばかりなら長電話もなかろうに。この他「趣味の句を練って急かない待ち時間」も好きな句である。

階段をかけても敬老乗車証

横地雅風

思わず声を出して笑ってしまった。規則とはこんな矛盾を生むものである。快い川柳味に浸らしていただいた。ありがとう。

善意だけ信じて歩く白い杖

中尾緑良

人間の性は善です。この心をいつまでも持ち続けて進んでほしい。

眠るための酒が増えてく管理職

平田実男

民主主義下の管理職とは、こんなものなのであろう。強い組合がある程、管理職は宙に浮く。最近余りにも騒がれすぎている、ある職場の記事を思いおこして、一層その感を深くしている。

恍惚になりゆく老妻の我も寂し

市場没食子

恍惚は誇張だとしても、全くですね。この句はまだ、老妻を同情の眼で見ておられるがひどいときがありますからね。

なお、秀句三〇句を選んだが、スペースがないためこれで終ったが、次の句なども味わってほしいところである。

筆おけばとぼけた顔の老大家

西森花村

こともあろうに豪雨の中で久しぶり

野村太茂津

月明りいとしい人の息使い

梅本登美也

春霞すみ絵の中の野良仕事

藤井明朗

愛染帖

橘高薫風選

東海に島ありハリネズミを育て　青森市　工藤甲吉
日本人臍下丹田など忘れ
勲章がバラバラと降る春と秋　鳥取市　河村日満
暫くは詩吟がつづく老いの会
再会の体驅世話型社長型　大阪市　小出智子
ひとり相撲の雨がしずかに降っている
隣の屋根もポストも雨期は避けられぬ　笠岡市　木山遠二
苦も楽も多かりしかなダイア婚
ダイア婚女房も皺になってくれ　岡山県　白岩文衛
平凡にこれからも生く団子鼻
十一時そろそろ郵便来る時刻　富田林市　岩田美代
だあれもくれないので勲章をつくる
誰よりもやさしく死んでゆくつもり　岡山市　井上柳五郎
春雷を聞く日僻地へ子の辞令
だんだんと鉄の女に妻がなり　西宮市　杉浦婦美子
黒子着た妻とあゆんだ五十年
再軍備たわけたことよ被爆展　米子市　八木千代
眼を閉じた隙間に潮が満ちてくる
五月には五月女の脱衣篭　高知市　西川富恵
さくらさくら恋もせぬまに散りはてる
五月闇とりのこされてゆくような　富田林市　藤田泰子
青い謎わすれな草を押花に
散る花は恋文裂いた紙吹雪　富田林市　中村優
モナリザの笑み真似る娘のひとりぼち
音のない風鈴指で突いてやる　島根県　榊原秀子
冷奴花の季節を過ぎてから
初鰹娘の新居でありがたし　高知県　曽我部つぎお
劣等感大きな人が横に居る
年令をとても感じるはしご酒　鳥取市　両川洋々
スト解除告げて時計も息をつく
ああ腹が無職は無職なりに減り　島根県　小砂白汀
正論を弱者が吐けば道化めき
愛そっと育ててマリモ聖らかな　吹田市　西川景子
虚無僧の吹く音にゆらぐ妻篭の灯
手のひらのインコがぽろりともらす恋　米子市　菅井とも子
散りぎわにひかれ今年も桜見に
いろいろな病者がかける白い椅子　豊中市　満仲きく子
鯉のぼりの口を黄砂が吹き抜ける
草笛に亡母さん答えてくれそうな　島根県　松本文子
雑草を刈るようパート首切られ
未練またこの裏道を通わせる　奈良市　森田カズエ
表彰状微動もしない文字ならぶ
X線メスで切られる阿修羅像　松山市　谷真風
中年の恋の色かな桐の花
囀りに明け黄金の朝となる　今治市　越智一水
核の傘ではない核のタテにされ
一歩でも歩こう反核デモならば　大阪市　西森花村
紙屑と義理人情の舞う場末
過去の事何も話さぬ場末の灯　守口市　長谷川司
雨蛙現代子ですビルに住み
キャンピングカーとしゃれこむかたつむり　伊丹市　樫谷寿馬
遺言に半濁点の字は省く　大阪市　神夏磯道子
一周忌母の死顔が花になる　八尾市　高橋夕花
自己愛の烈しきままに雨季となる　大阪市　朝倉利義
かなう夢かなわぬ夢が見えて齢

岡山県　松本元江
亡夫の影優しさだけが甦る
今治市　月原宵明
極彩色の森で仏さまひる寝
米子市　林瑞枝
真ん中に居る錯覚を持つ女
鳥取県　林露杖
戦友の墓前まざまざ敗走譜
高知県　赤川菊野
愛された記憶も遠い姫鏡
堺市　田辺哲寿
独り呑むお酒の燗は熱くする
米子市　雑賀美世
かけひきの腹は読めないコンピューター
堺市　高橋千万子
善人になりきる疲労感しきり
米子市　青戸田鶴
吊橋に揺られて未知の旅へ出る
高槻市　田崎あき子
サービスの新茶が香る駅構内
歌和和山市　浦野和子
夕映の向うに韋駄天の鬼が棲む
西宮市　藤村宏子
そよ風と同じ軽さにカットする
堺市　久井富子
花時計止まってあげて待ったげて
和歌山市　西山幸
韻きあう鈴も無口になりはじめ
岡山市　川端柳子
愛は素手泣いて笑うてきた歴史
西宮市　奥田光子

春愁に智恵子を真似て紙ちぎる
東大阪市　米田喜一郎
総領を亡くして女系建てなおし
大阪市　山根いつを
はるばると訪うた桜が昨夜散り
西宮市　林はつ絵
汗拭いて鳴らない笛をじっと見る
鳴門市　八木芳水
過去のこと戻って見たい橋もなし
浜田市　佐々木裕
風の声まだ俗物で居る決意
富田林市　田形美緒
サギ犯が信用出来る自白する
京都市　松川杜的
東北弁うつうつ聞いて春の旅
八戸市　島田昭治
老い方の上手な母で愛される
倉吉市　奥谷弘朗
肩書をやっておさえた顕示欲
滋賀県　久保和友
友ひとり電話と手紙使いわけ
宝塚市　吉田笑女
風邪やっと癒えてまぶしい五月の陽
鳥取県　鈴木村諷子
老婆一人語りきれない山と川
大阪市　欄蘭
ファミリーレジャー動物園で茶をにごし
藤井寺市　児島与呂志
自己主張過ぎた悔いあり二日酔
枚方市　二宮山久
母の味受け継ぐ妻も歳重ね
寝屋川市　宮尾あいき

雨の情うなだれる程に受けてバラ
岡山県　稲岡正之
辞書にない言葉時代を駈け回り
羽曳野市　吉川寿美
醜女にも醜女の安らぎ万華鏡
西宮市　妹尾春江
数言わぬ母の意見で座が締まる
唐津市　仁部四郎
来資の早い帰りへ大拍手
島根県　木村はじめ
焼鳥の串縦に食う横に食う
千葉県　中村有人
包丁のリズム女の心にて
唐津市　浜本千代
人形に仕上げて和紙に血が通う
島根県　堀江芳子
ワンカップでは酔えないと墓の亡父
島根県　堀江正朗
雑草を食べた記憶の葉が育ち
岡山県　直原七面山
飛行機に命あずけている不安
三重県　坪田冬花
もう一つ横の目を待つダルマの目
大阪市　藤森小雅子
ジョーカーを握って数奇の旅にいる
仙台市　川村映輝
国鉄を潰した赤旗何処へゆく
海南市　牛尾緑楼
かみ合わぬチエの輪を父と子と
島根県　西村早苗

人間の悲しさピエロとなる酒で　米子市　野坂なみ
目覚しが狂った朝はパンも焦げ　浜田市　中川幸一
戦前戦後変らぬ大の主義思想　高知県　山下登舟
硝子戸へ絵がきしさまに火蛾とまり　唐津市　岩崎実
先生と呼ばれてうとい社会学　唐津市　田口虹汀
一本の糸が命よ博多独楽　唐津市　久保正敏
飼い犬と孫に不況の影もない　岸和田市　福島せつ子
禁酒する覚悟の父へ力添え　和泉市　西岡洛酔
丸い背に仕事の歌が秘めてある　大阪市　吐田公一
明日の芽が息吹く樹氷へ春はそこ　高知市　北川竹萌
打った杭ゆさぶりて尚確かめる　羽曳野市　麻野幽玄
ラン咲いてしばしメーンの座を飾り　河内長野市　井上喜酔
流れ星きっと宇宙の落ちこぼれ　堺市　大道美乙女
水鳥の何語らうか寄り添うて　平田市　久家代仕男
着古した方に目を引く形見分け　東大阪市　三宅旭
古寺に誇らし顔の鬼瓦　島根県　大森孝華
法要へならぶメンバー若がえり　米子市　小西雄々
男対女のトラブルには弱い　島根県　東原福子
奔放にダンス曲弾き反抗期　大阪市　川口弘生
眼横鼻直魔法使いの鼻高い　大阪府　坂口公子
捨てられた春菜はゴミの山で咲く　奈良県　宮川古都路
母逝きて古梅が瓶に残る味　東予市　小山悠泉
ジーパンも白衣も交じるへんろ道　和歌山市　福本英子
へつろうて生きて確かに死んでゆく　水戸市　上鈴木春枝
生えて来たたった二本の歯に嚙まれ　尾鷲市　渡辺伊津志
リズムには自棄の響きのある海鼠　大阪市　大野武太
はみだした男とおんなの生きる詩　今治市　蔦本昌道
亡き父の年へ近づく自閉症　寝屋川市　柴田英千子
汗かきのたちへやさしい路地の風　高知県　藤原岩男
母の恩に重みを感じ闘病記　西宮市　西口いわる
つつじ燃え母の命日近くなり　吹田市　西岡豊
サービスに燃えて多弁となる女　和泉市　岡井やすお
負っ振り良いのも人気大力士　岸和田市　島崎冨志子
コンピューター腹一ぱいに詰めこまれ　唐津市　新岡回天子
五十点わたしの妻だ八十点　唐津市　浜本久仁於
夕立を雑草あぶくほどに飲み　和歌山市　松原寿子
曲つけておたまじゃくしを泳がせる　羽咋市　三宅ろ亭
国民をゆすりたかりときめつける　★

投句先　〒560 豊中市中桜塚3—13—15
橘高薫風宛（ハガキに三句以内）

NHK川柳募集

課題　「我が家」　選者　橘高薫風

締切　7月10日
（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3—43NHK
大阪放送局〝老後をたのしく〟係

発表　7月25日（日）ラジオ第一放送
午前10時から

秀句鑑賞

―水煙抄―

―前月号から―

村上春巳

不器用な男の涙見てしまい

津山　刀水

浜口庫之助が感激を懸命にこらえ、「涙クンさようなら」を歌い終るまで涙を見せなかった。五月二十日のテレビである。

我々サラリーマンの送別会でよく見かけるシーンだが、四十年近く勤めた職場を去る人にとって、励ましの言葉と酒、その中に色々な感情が重なって遂に落した涙、それがもう止らない。見ては悪いような気持の内にこちらも貰い泣きしてしまう。この句から友の情、温かさをふつふつと感じさせられる。

羽繕いばかりの一生かも知れぬ

寺田　裕美

小鳥が羽繕いをしている、一寸考えてまた続ける、羽繕いを止めた時は一生の終りの時である。人間の世界でも精進に精進していても晴舞台は来ないかも知れないが、何もしないでいていざと言う時に悔いを残す羽目になるよりもずっと良い人生ではないだろうか。

自動ドア開きたくない客もある

坂部紀久子

いくら客筋の良い会社や店でも虫の好かない客の一人や二人はあるものだ。故障でもして開けないでやろうかな、そしたらドアの前で、うろちょろ、うろちょろ、一人芝居をしてから回れ右して帰って行くだろう。その背中へ大声で笑ってやろう。きっと胸がすうーとするだろう。

善人のすぐに出したい正誤表

蔦本　昌道

「えらいこと言うてしもた」と、後で悔まれることは私共にはよくあることだ。「まあいいや」で済まされる人は幸せだが、今日は弁解するにも術がない。やるせない気持ちを抱いて明日を待つ善人、そんな心情を正誤表としたのは楽しく頂いた。

この俺もにせものだったかも知れず

越村　枯楢

正直に生きて来たつもりでも、他人様の目にはこの自分が如何に写るのだろうか。

するすると手許をぬける子の育ち

細川　稚代

私は母親の顔を知らないくらい早く亡くし子供も持たないのでこの句を評する資格はないかもしれないが、つぎつぎ手許を離れて行く子供達、それでも血の繋がりを信じて待てる母親は幸せなんだろう。

家計簿に女のぐちを詰めておく

清水　康恵

じわじわと生活を締めつけてくる物価、欠かせない義理への出費、子供達の教育費、大声で「なんとかしてくれ」と叫んで見たい。でも父ちゃんは朝星夜星で稼いでいてくれるのだ。私のぐちはそーっと家計簿に秘めておこう。

定年と言う安心は母にない

浜本　千代

我々サラリーマンは一生働かねば食えない時代だが、一応は定年というホッとする時が来る。女にはそれがないのだ。結婚して出産、子供の教育にやっさもっさしていたと思ったら、好きなひとが出来たと結婚、その内に孫の出産、息のつく間もない内に人生も終末に近くなっている。そんな苦労も孫の笑顔に嬉しく騙される幸せがある。

ましなウソつけずたばこも輪にならず

舟渡　杏花

「うそ」という演歌がある。折れた煙草の吸いがらで、あなたの嘘がわかるのも……、平気な顔をしていても心の中は穏かではない。後の得意の煙草の煙が輪にならない。

知らぬ顔しても野良犬ついて来る

松川　芳子

犬好きは犬が知ると言うが、動物の本能は素晴らしい。

四月馬鹿夫婦で別なこと思う

津山　刀水

寒い冬からの開放感、この頃に小さな悪魔が悪戯をする。仲のよい夫婦に普段考えたこともないようなことを考えさせるのだ。

吟題課

新聞

林露杖選

朝刊の音から街も目を覚まし　春日
新聞が我が家の明日へアドバイス　喜酔
新聞の記事から部下に訓示する　豊
ふるさとの事件身近に読む新聞　山久
新聞に載ったおかげの作句熱　つぎお
新聞を切り抜く老母にある未来　道子
しけ三日島へ新聞束で着き　悠泉
新聞の知恵を拾って自然食テル　倫子
新聞で覚えた料理ほめられる　四郎
敷いていた朝刊を読む坐り込み　枯梢
色褪せた古新聞にある懐古　文平
道ならぬ恋を叱った投書欄　勝美
新聞のコラムに教わる夫婦仲　右近
新聞の戦争記事に目が痛む　武水
古新聞集める子らの汗光る　富子
事件記事スターの齢が暴らされる　規不風
新聞で妻よ帰れがあと断たぬ　佳雲
高物価衝いた新聞値上げする　代仕男
新聞の隅で老師の訃に接し　優
新聞の美談に軽い朝の靴　一
朝刊が今日へ発破をかけにくる　頼
新聞の隅で火を吐く小市民　はつ絵
根性を養う新聞配らせる　克枝
新聞にその日その日の知恵を借り　義美
愛人と情婦を新聞書き分ける　正敏
生者必滅医学博士の死亡記事　泰子
新聞に出た夜電話が鳴り止まず　素身郎
新聞が語る故郷の夏の色　白李
地方版遍路の列を撮って春　明水
改憲の記事に一億目が光る　圭介
新聞の活字怖いと思う日も　文子
新聞を読んでるトイレ叩かれる　宵明
新聞が来ましたていよく起される　芳子
朝刊の知恵で挨拶しめくくり　可住
新聞がのんびり読める孫の留守　テルミ
新聞で包む気軽なおつきあい　久仁於
母の愛新聞包みにそっと詰め　軒太楼
朝を待つ老いに新聞音をくれ　ゆう也
覗き見をすれば新聞貸してくれ　昌道
パン焼ける間朝刊あてがわれ　花村
社説今日言いたい事を言ってくれ　弘朗
新聞に真心包むお裾分け　胡頽子
夕刊を拡げて今日も無事に昏れ　凡太郎
朝刊のトップ総理を切って捨て　洋々
新聞を配る零下の白い息　どんたく

特集に誘われ新聞きりかえる

乗り気

文川一念選

乗り気ではないが一肌脱いでみる　枯梢
乗り気にはなっても体ついてけず　秀峰
合槌でうまく乗り気を誘い出し　弘朗
仲人の勘が乗り気を引き合わせ　英壬子
代議士が乗り気になってこわくなり　花村
こと金になって乗り気が向きを変え　悠泉
再婚に気乗りのしない姉であり　虹汀
二回目の恋に乗り気かいそいそと　司
機械化へ乗り気になって来た社長　つぎお
乗り気ない見合いでも行く美容室　利義
待たされて乗り気うすれるショッピング　テルミ
都合よくかつぎ出されている乗り気　芳子
軍拡へ乗り気憲法変えたがり　洋々
相談へ乗り気に遠い生返事　婦美子
乗り気だと見た顔色に喰い下り　軒太楼
資本家の乗り気話だけの席　文子
熟年の趣味に乗り気がふと生れ　千世子
咳ひとつ軽く乗り気を戒める　重人
子供だけ乗り気左遷の土地へ発つ　明水
商談が乗り気になって酒が入り　喜酔

乗り気出す子に開運も味方して　浜本千代
計算を乗り気な顔に描いている　裕
値ぶみして乗り気さとられまいとする　秀子
あっけない乗り気にさせた口車　松太朗
石橋を叩くと乗り気が消えて行き　勝美
本人の乗り気を知らずケチをつけ　柳五郎
目の色を読まれ値引をしてくれず　哲寿
芯のある男に乗ってやる男　克枝
ときめきを秘めて乗り気の旅もある　正敏
男はん京の言葉にすぐ乗り気　久井富子
ここからは座り直して聞く話　哲寿
先方の乗り気冗談とも言えず　春草
乗り過ぎた酒が冷たい汗となる　文平
ケチン坊が乗ればみんなが降りている　公一
乗り気またじわりと崩す煙草の輪　刀水
返盃に男その気をたしかめる　一進
のりだした膝を女の眼が押さえ　久仁於
　佳
もう勝った様な乗り気にさす予想　雀声
タンポポを乗り気にさせた初夏の風　御前
唇の動きを真似ている乗り気　伊津志
聞かされた穴場早速靴をはき　大柏
客寄せの手拍子乗り気にさす歩幅　宵明
　人
新しい靴を履かせていた乗り気　一路
　地
だんだんと乗り気にさせて来る手相　可住
　天
乗り気とは言わぬがお茶をかえに立ち　佳雲

　軸
握手した力が語っている乗り気

ひと言

松原寿子選

まだ消えぬあのひと言につのる思慕　實
男ならひと言でよい有難う　秋月
ひと言が大事フィーリングの世代　伊津志
ひと言を言わせて呉れと束ね髪　亀甲
ひと言を待って高鳴る日の不信　緑良
棘のあるそのひと言を守り抜く　木魚
ひと言もいえずに両手さし延べる　虹汀
恋の芽があのひと言で土を割り　凡太郎
ひと言も言えず涙でぬれる膝　三吉
ひと言は次ぎにまわしてケリをつけ　勝一
ひと言が欲しくて巡る百度石　枯梢
ゴマすりがひと言多いへまをやり　みつる
ひと言の意地は涙など見せぬ　久仁於
ご免ねのひと言喉を上下する　満津子
　旭
鬼になり仏にもなるひと言が　弘朗
ひと言が効いたか素直な妻になり　朗
ひと言へひと言返し火花散る　武水
ひと言を残せば貴方待てたのに　美恵
ひと言を回り回してやっと言い　博友
追伸のひと言重くのしかかり　大柏
ひと言で言えば愛想がなさすぎる　泰子
言い過ぎたひと言仕舞う場所がなし　はじめ
ひと言を付け加えてる老婆心　有人
ひと言のミスがテープに生きている　宵明
ひと言は独りで言えば詩になる　幸一
ひと言の重みに泣いた貧しさよ　文子
ひと言に女房かえす機関銃　蕉露
どん底で遇ったひと言今日を生み　一止
ひと言で大臣の椅子棒に振り　哲寿
ひと言を呑み込んだから円く済み　本蔭棒
耳底のひと言謎のままでよい　規不風
ひと言も言えない椅子が隅にある　一路
ひと言が夫婦茶碗のひびになり　芳子
ワンマンのひと言歯車回り出し　重人
　佳
ひと言は同じ肩書きがちがう　可住
ひと言も言わせずに妻酒の燗　水煙
口火ともなるひと言を抱く女　カズエ
ひと言は祝辞内助の功にふれ　明水
ひと言が呪文のようにつきまとう　はつ絵
　人
ひと言を写真の父に聞きにいく　四郎
　地
ひと言が波紋を呼ぶから貝になる　日枝子
　天
ひと言が帰路で激しい渦となる　道子
　軸
ひと言に女の海が満ちてくる

初歩教室

題 ― 演　技 ―

本田恵二朗

自分をカッコよく見せようとか、名を売り顔を売ろうなどの気持ちがひそんでいるうちはまだひよこである。それは迷いの時代である。迷い時代を抜け出して、振り返ってみると、ひよこであった自分の姿があわれでありナンセンスであることが自覚される。

徒らに背伸びをしていたものだと悟ると同時に、地のままの自分の体勢が一番気楽であることに思い当るであろう。地のままこそ本当の自分なのである。自分こそ他の何ものでもないことを知ってからの作こそ本ものの句である。

苦労など忘れたような名演技　柳右子
（精進の汗でつかんだ名演技）
眠っていても演技になっているパンダ　同
（寝相まで演技になっているパンダ）

演技ではない真すぐな目に出会い　春枝
（演技ではないよお目目が澄んでいる）
嘘一つ下手な演技を見破られ　同
（嘘の皮下手な演技と見透かされ）
アドリブがきいて演技をカバーする　寿堂
（アドリブをほどよくまぜて芸が生き）
大根のなますになった味を観せ　同
（大根がなますになった味の芸）
演技だと知ってて一緒に泣いてやり　ふみ
また乗ったあいつの演技うますぎる　同
（うますぎる演技にまたも乗せられる）
体当りの森光子ありて放浪記　茂美
（森光子の演技に放浪記が生きる）
身ぶり手ぶり黒子の演技見える席　同
（文楽人形黒子の演技に助けられ）
卒園の懸命な演技に胸あつい　千子
（卒園児の懸命な演技が胸を打つ）
演技するタレントがかもす芸の幅　同
（タレントの演技がかもす芸の幅）
演技さす見えぬ力が効いている　風童
脇役の力をかりている演技　山久
（三枚目の演技にほどよく助けられ）
盛り上りここが観せ場の演技力　同
（演技力観せ場山場を盛り上げる）
国宝の叙勲は演技でない素顔　小雅子
演技派の背に科白のない演技　同
（科白なき演技背に観せ肩に見せ）
真実の愛へ演技などいらぬ　胡頽子
悪役の演技で沸かす時代劇　同
（悪役の演技にくたらしく沸かす）
能面も心の演技へ生きてくる　紀久子
（国宝の演技に能面生きてくる）
演技だけ達者ハートのない政治　同
（政治屋の演技ばかりが先走り）
新人の見様見真似という演技　勝美
（先輩を真似た演技のぎこちなく）
演技とは思いたくない嘘を聞く　同
大物の逮捕堂々演技する　保夫
憎まれ役罵声を浴びた演技力　同
（罵声が飛ぶとぶ悪役の演技力）
泣き笑いと拗ねる演技で女生き　義美
演技する蝶はくらしを背負っている　同
（生きるため女蝶が派手に演技する）
上役の下手な演技に付合いし　みつる
（上役の下手な芝居に助演する）
演技する夫の脚本妻が書く　者同
（妻の台本の通りに演技する）
演技たっぷり話す女のつけまつ毛　貞子
（演技たっぷりペラペラ喋るつけまつ毛）
演技よろしく母とき伏せる娘　同
（たっぷりとねだる演技を娘がおぼえ）
五十年妻の演技も枯れてきた　凡太郎

（半世紀妻の演技の味も枯れ）
おみごとな演技辞表を叩きつけ　同
泣き落しうまくこなして夫の負け　芳水
（泣き落し妻の演技にまたも負け）
好演技の涙で人を泣きはらせ　同
（万点の演技が涙誘い出し）
甘えたい演技を赦す瞳が温い　寿子
脇役の演技にみごと寄り切られ　同
（おみごとな助演に主役食われそう）
子の手品観ている親がハラハラし　瓢太
（親の目をハラハラさせる子の手品）
強力な脇役充実した演技陣　同
（脇役のたくみな演技が盛り上げる）
歌麿の筆が演技のチラリズム　利美
（歌麿の演技ちらちらのぞかせる）
ホステスの客を手玉にとる演技　同
（ホステスの演技まんまとしぼり取り）
お悔みの涙の演技さえに冴え　柳五郎
（お悔みに涙を添える名演技）
如才ない男の演技につめたい目　同
（如才ない男の演技あわれとも）
美しい人の仕草は演技めく　元江
磨かれた演技に心奮われる　同
（磨かれた演技がまばたき忘れさせ）
（名優の至芸へまばたきふと忘れ）
演者の目お客に渡す貰い泣き　古都路
（名演技客の目頭熱うする）
フィナーレ無事に演技を終えた汗　同
（フィナーレ熱演の汗光らせて）
仲人の学を短歌に演技させ　芳枝
（仲人さん短歌で演技して見せる）
贈り物過分な演技つめてある　同
（プレゼント温い演技が詰めてある）
タレントは離婚もうまく演技する　やすお
演技力人気とはまた別らしい　同
はったりを方便とした日が暮れる　昭治
見えすいた芝居胸糞悪うする　同
オーバーな演技に優る人間味　三男
歌唱力より先走る演技力　同
孫二歳可愛いい仕草覚えめ　同
名優かも知れぬ詐欺師の演技力　武太
小男の演技が舞台を狭くする　同
演技力買われて万年幹事さん　同
心からなのに演技と読みとられ　三五島
玄人芸どこが演技かわからせず　同
名演技じんと心をしびれさせ　同
乱れ飛ぶ野次にも演技忘れない　幸子
演技など知らぬ素直にある魅力　同
演技力出すぎて自分を見失い　同
空涙流す演技はお手のもの　千代
演技した日から心の通う仲　同
演技する女の不幸垣間見る　同
二枚目で通して齢をとらぬ芸　武水
寒い夜のそばを扇子で食べて見せ　同
演壇のキザにコップの水を呑み　同

題―**折れる**―**7月20日締切**（9月号発表）
宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
〒七一一　**本田恵二朗**

川柳塔社常任理事会（6月1日）

出席者＝太茂津・薫風・潮花・鬼遊・史好・与呂志・柳宏子・酔々

〈議事並びに報告事項〉

★中島生々庵、三条東洋樹両氏の句碑が、岡山県久米南町川柳公園に建立される。その除幕式は6月13日午前11時30分から挙行される運びである。6月本社句会で発表して参列者を募る。小石・文衛・薫風諸氏出席の予定。

★7月本社句会は、路郎忌であり、供養として、用字便覧を本社より参会者へ贈呈する。（酔々記）

■**7月**の常任理事会は**1日**（木）

川柳の冒瀆

直原七面山

久し振りに会ったA氏から〝B社の主幹が（柳誌で）「川柳大会では選者級の人々は出句を見合すべきだ」と言っていたよ〟と聞かされて、私は事の意外さに驚くとともに、心の中では〝まさか川柳の神様でもあるまいに、自惚れもいい加減に・・・〟と叫んでいました。

そして、こうした妙な考えを持つ人に、大会の選を依頼することが、果して妥当なのかどうか、この人に他人の選をする資格が有るのかどうか、もし有るとするなら、これは正しく〝川柳の冒瀆〟以外の何ものでもないではないかと思いました。

またK主幹は何故〝選者級の人は出句をしない〟などと言うような、そんな無謀で姑息な手段を弄してまで、川柳人口の増加を図らなければならないような窮地に立たされたのか、理解することが出来ませんでした。

なんとなれば、凡そ作家という者はその誰れ彼れを問わず、ありとあらゆる機会をとらえて作句に精進し、投句を繰り返えしつつ、その作品の評価は人々の手に委ねて、絶えず句力の充実と向上を図り、他の人々の追従を決して許さぬだけの、独自の個性豊かな作風と句境を保持しつつ、名句、佳吟（いのちある）をどんどん作って世に発表し、その作品自体を通して多くの人人を誘導しつつ川柳人口の増加を互に図って行くのが作家としての務めであり、使命であると堅く信じ切っているからなのです。

まして主幹ともならばなおさらのこと。また一軍の将ならば将らしく、川柳から逃げを打つようなそんな卑劣な言動は絶対にしないで、自ら進んで川柳戦線の陣頭に立ち、自らの血と汗を流しつつ渾身の知力を振り絞って〝川柳〟に真っ正面から挑戦し、その戦う雄雄しい姿を人々の目に晒しながら川柳界を指導して行くことこそ、将たる者の真の川柳活動だとそう思い詰めているからなのです。

従って私は、もしこの主幹の方の迷論妄語に誑かされて、これに同調し、これを実行する選者級の人が一人でも多ければ多いだけ川柳界は永久に混迷と停滞とを繰り返して、川柳の将来の発展などは到底望み得ないのではなかろうかと、それが心配でなりません。

一分間の柳論

藤井春日

私が川柳を始めたのは故田垣方大さんの勧めによるもので最初の頃は作句ごとに駄句の連続ばかりでした。句会に出て抜けないことを非常に悩み苦しみました。今も初心の人が同様なことで苦しんでいるようですがこれは大変な間違いで、没になった句を大切にして何故没になったかを研める努力を先ず養うことが上達の方法ではないでしょうか。秀句を作ることに長けている人の句をよく吟味し着想と表現の方法を習得する以外に何物もない。名工の苦心の逸品もまたしかり、一にも二にも研究に努めることが肝要で、選者を恨みまた作句を断念するのは世の文化に遠くいる実に悲しい限りで、自分に自信を持って没を平気でいられるよう心掛け常に作句に精進して貰いたい。何時かはその作品が多くの柳人の心を動かす立派な作品となることと思います。抜けることは自信の礎にもなることでしょう。

柳界展望

（原稿締切毎月末）

集録・香川酔々

■東広島かも川柳会では、創立20周年を記念して大会を開催される。時・57年7月11日午前9時所・東広島市中央公民館兼題・余韻、志願、偶像、非凡、鬼火、風船、伝説、絵本、変身、満潮。特別課題・足跡（鬼焼選）会費・千五百円欠席投句料・五百円投句先・〒724東広島市西条町寺家5808高橋鬼焼宛

■鑑賞川柳五千句集刊行神田仙之助・礒野いさむ・渡辺蓮夫編

全国の川柳吟社八十九社（岡山県からは川柳岡山社と弓削川柳社）から推薦された約一万句の中から、更に五千余句を選びだして、人生（神田仙之助）生活（渡辺蓮夫）社会（礒野いさむ）季節（礒野いさむ）家庭（神田仙之助）職業（礒野いさむ）自然（渡辺蓮夫）動物（神田仙之助）趣味（渡辺蓮夫）の九部に分けて、鑑賞を試みている各項目の執筆者は野村圭佑氏外15氏。それぞれの秀句20句には評釈がされている。

現代川柳の集大成として有意義な好著、全国主要柳社一覧が附記してある。

B6版　二八四頁

定価・千七百円

発行所・有斐閣

■耳ぶくろ　楠本憲吉選〈よみうり時事川柳秀句集〉

読売新聞東京版よみうり時事川柳の選を、53年4月から俳人楠本憲吉氏が担当56年10月までの入選句約六、三〇〇句から更に選び抜いた一、九六〇句を、年月順に時代背景の解説を行い「政治・経済」「文化・スポーツ・芸能」「生活・世相・風俗」に分類している。外に時事川柳ベスト50選、純粋川柳30選。なお楠本憲吉氏が「現代川柳論」を俳句と比較しながら判りやすく現代川柳論を述べている。また、終りに「よみうり時事川柳90年―藤森文雄」も収録。

B6版　二〇六頁

定価一、二〇〇円〒250円

発行所　読売新聞社

■川柳宮城野社では、一人15句を対象に、56年度宮城野賞を次のように決定。

同人の部　佐藤　安男

会員の部　大田和たか

また最優秀作品賞も発表

入賞　大田和たか

待つことに馴れて女の火をともす

準入賞　黒沢かかし

ひと一人赦すに廻り道をする

■第33回新潟県川柳大会は7月4日（日）新潟市南万代町一―八新潟厚生年金会館で開催される。会費千円、宿題（各2句）＝日本海、群、肩書、種、かくれんぼ、雑詠、選者は順に岸本吟一、寺尾俊平、成田孤舟、水瀬片貝、海津真太郎、大野風柳、席題当日4題発表、12時締切、講演「ユーモアと風刺〈東と西〉」速川和男立正大学教授、20位まで表彰欠席投句は6月20日までに投句料五百円同封で提出。

投句先・956新津局私書箱15号　柳都川柳社宛

■札幌川柳56年度各賞決定

あかしや賞　黒沢かかし

ぽぷら賞　高田輝亜旗

幌都賞　明星　敦子

〃　加藤かずこ

〃　小林　正枝

なお功労賞に、宮本初枝丸山英柳、前川都女、沖田いしの四氏が受賞。

■名古屋川柳社

秋の川柳大会

日時・9月19日（日）10時

会場・葵会館　名古屋市西区那古野町2丁目18―23

宿題と選者

靴ベラ　氏田騒太郎選

目　玉　森　淞鳳選

どこかで　会田規世彦選

五百円玉　保地　桂水選

オルゴール　浅野　滋子選

正　論　鈴木　如仙選

絆　加藤　翠谷選

人間味　名波　勝選

肩すかし　市川　鱗魚選

あやふや　丹羽　麦秋選

片手落ち　中江　一魚選

席題・なし　各2句詠

会費・千円　粗食、参加賞呈

賞・市長賞以下25位まで

投句・五百円　9月10日発表誌呈

451名古屋市西区緑場町1―26　中江一魚方

主催・名古屋川柳社

■柳都川柳社では、第8回白石朝太郎賞受賞者を発表した。吉平一岳氏作品先頭を走る男で寂しがり

▽同人・柳友消息△

▼菊沢小松園氏（大阪市）かねて入院中の大阪府立病院から五月十日、大阪労災病院（堺市金岡）に転院され

た。なお当分療養に専念される。

▼河村日満氏（鳥取市）文芸協会のメンバーの方々と赤穂へ史実研究の旅との由旅信をいただく。

▼川口弘生氏（大阪市）広島市で同窓会をもよおされたとのことである。

▼京都塔の会では、寺田屋吟行を開催。吐的・萬的氏他寄せ書き拝受。

▼工藤甲吉氏（青森市）八月号目次下エッセイ執筆中とのこと。

▼大路美幸氏（八尾市）ご尊父美則様5月20日逝去。行年74歳。謹悼。

▼又座英氏（時の川柳社）が長逝された。関西柳壇でまた一人惜しい方を失った。合掌。

▼広井すえお氏が辻圭水氏の後任として、南海川柳部部長の任に当たられる。

▼海士天樹氏（ふあうすと社）3月23日に大阪日生病院にて、胃半分切除の大手術をしたが、経過良好のこと、何よりのことである。一日も早いご快癒を祈る。

▼市川鱗魚氏（岐阜市）このたび黄綬褒賞の受賞を記念して、句集「土」を発刊された。

新同人紹介

野中御前（ごぜん）
—日満・弘朗推薦

天満三千代
—武雄・太茂津・登志代推薦

冨上光代（とみかみ）
—太茂津・柳宏子・武雄推薦

中島正博
—武雄・太茂津・凡九郎推薦

堀端三男
—武雄・雀踊子・太茂津推薦

大野武太（たけた）
—太茂津・英子・武雄推薦

坂部紀久子
—太茂津・武雄・柳宏子推薦

細川稚代（さちよ）
—太茂津・武雄・凡九郎推薦

山路佐代子
—太茂津・雀踊子・千寿子推薦

▽句会案内△

■菜の花句会
時・7月10日（土）夕6時
場所・西郷会館（八尾神社境内）近鉄八尾駅下車
兼題＝少女、ゆれる、条件、ガレージ、大阪風景。

■南大阪川柳会
時・7月19日（月）夕6時
場所・寺田町裏駅東南、高松会館
兼題＝薄情、久しい、負担、平凡。

■東大阪川柳同好会
時・7月24日（土）夕6時
場所・東大阪中央公民館、近鉄永和駅前
兼題＝溢れる、いたわる、洗濯、軽装。

■南海川柳部
時・7月15日（木）夕6時
場所・南海会館ビル南海電鉄本社地下食堂
兼題＝運勢、役員、駅ビル

■駒つなぎ川柳会
時・7月26日（月）夕6時
場所・寺田町高松会館
兼題＝ミニバイク、青写真、蚊、あばら骨。

白岩文衛句集
「出会い」出版記念六月句会

57年6月7日午後6時・金属会館

司会者のテーブルに豪華な山百合の花が飾られ、芳香が漂う。白岩文衛さんの句集出版のお祝い句会に地元から出席された大原川柳社の土居耕花、井上寛平、福原辰江、千原信恵、松本元江、千原理恵、土居みさえ、土居ひでの、剣持美代子、春名巴子、貞森朝代、豊福地佳平の皆さんがお土産に持ってきて下さった花である。金属会館最後の句会は、なごやかなうちにも熱気溢れる句会となった。

西尾栞副主幹は先月末、体調を崩され歩行もやや不自由のところを押して出席された。周の太公望が文王に見出される故事をひき合いに、出会いの大切なことから、話しは太公望の連想で釣りの川柳の紹介。「釣竿屋二間の竿が伸びぬ店」「釣人の根気見ているのも根気」「釣堀で会い職安でまた出会い」「健康のためだと今日も釣ってこず」「釣竿の手入れを雲にのぞかれる」etc。最後は〝なぞかけ〟で苦心の柳話をしめくくられた。

川柳塔社常任理事会からの記念品を栞副主幹から、塔社からの花束が西出楓楽さんからそれぞれ贈呈。

文衛さんは五月三日、大原での祝賀川柳大会でお礼の挨拶をされた中で「盲亀浮木」という仏教の言葉をひいて、出会いということの不思議さ、有難さを述べておられる。これからも、お互い〝出会い〟を大切にしたいものだ。初出席は富田林の田形美緒さん、藤井寺の赤木和子さん。

六月の月間賞は小出智子さんに輝く。

（史　好）

（受付―与呂志・重人）

（進行―柳宏子、記録―鎮彦・健司）

出席―薫風・与呂志・滋雀・千代三・寛平・耕花・美代子・みさえ・ひでの・太茂津・巴子・信恵・文衛・元江・理恵・朝代・辰江・勝美・重人・育園・きみ・三男・千万子・水客・綾珠・春蘭・潮花・雅風・瓢太・喜風・古都路・武太・喜一郎・美智子・三十四・鬼遊・楓楽・泰子・柳宏子・糸葉・射月芳・悦郎・作二郎・栞・頂留子・規不風・和子・萬的・雀踊子・度・岳人・一二三・千寿子・寿子・冬葉・吸江・芳川・紫香・美緒・富子・洋敏・山久・文秋・史好・英子・凡九郎・涼一・智子・鎮彦・博泉・庸佑・幸生・酔々・柳伸・健司・修史

席題「本音」

小出智子選

的少しはずして本音探ってる　千寿子
堂々と本音が言えぬ回り椅子　庸佑
さりげなく本音を聞いた聞き上手　勝美
美しく乱れて本音など要らぬ　千代三
宴なかばそろそろ本音出て来そう　理恵
河内弁すぐに本音を出しとなり　重人
毬はずむその空間で抱く本音　寿子
本音まだ少し残っている乾杯　岳人
花ざくろすこし本音のある女　作二郎

夫婦独楽本音はきかぬ事にする　雀踊子
ダークスーツの中へ本音をとじ込める　楓楽
一日中しゃべって本音まだ言えず　千万子
十字架の裏に本音を秘めている　芳川
信心の寺で本音を笑い合い　水客
お互いに本音を言わぬからこじれ　柳宏子
少しでもお金にしたいのが本音　潮花
もの言わぬ人で本音を計りかね　文秋
時効になってから本音しゃべり出し　吸江
元気で良い成績よければもっと良い　美緒
兄嫁の本音は聞かぬ事にする　規不風
神様にお願いしてるのが本音　雀踊子
いつも本音を聞かされているぼたん　度

席題「かばう」　土居耕花選

聖書読むぼくの本音を言うものか　酔々
花クルス花の本音を聞き洩らす　作二郎
男から男へ本音など要らぬ　きみ
聞き流す本音へ木の葉ゆれている　柳伸
棺に釘打つまで本音吐かないぞ　史好
凧上げの糸をほどいている本音　作二郎
銭湯のぐちは本音と聞いておく　度
似たもの夫婦で本音さらけ出し　水客
のどもとで本音をぐっと押し返す　庸佑
エマニエル夫人が好きな男たち　鬼遊
仁王さんの眉は本音を貫いて　智子
かばう気がいやな相手にされている　博泉
私生活まで監督にかばわれる　洋敏
踏切りは女をかばわねばならぬ　酔々
たてまえを楯に乳房はかばわれる　与呂志
これ以上かばい切れぬとさじを投げ　庸佑
ささやかな暮らしを愛の手でかばう　美智子
そのときは庇ってくれぬ核の傘　鬼遊
嫁かばうていつのまにやらかばわれる　信恵
かばわずに置けば独りで起き上り　文秋
庇う気が記憶に無いと返事させ　美緒
きれいごとだけではかばい切れぬ傷　潮花
かばうから本気で父が怒り出し　紫香
かばうてる言葉が底をちょっと見せ　凡九郎
かばい合うから黒い霧になる　酔々
部下かばう先輩出世に遠くいる　三十四
哀しみの向うにかばう塀があり　悦郎
子をかばう弱くなるなと知りながら　規不風
先生がかばう子エエシの子やそうな　千代三
故郷をかばう言葉になっている　水客
自分だけかばい世間を狭く住む　楓楽
庇われることがきらいな父米寿　泰子
ローヒール履いてお腹の子をかばう　和子
妥協して終着駅で庇いあう　太茂津
ある日ある時己れをかばう嘘をつき　洋敏
長男が嫁を庇うて敵になる　鬼遊
右足をかばう左でポーズする　幸生
一歩手前で敵をかばっているゆとり　寿子
さりげなくかばうてくれる煙草の輪　英子
友かばう一言駄洒落などはさみ　萬的
子についた親子ゲンカがこじれ出し　博泉
ばあちゃんがかばうて共に叱られる　巴子
傷口をかばい合ってて馬が合い　庸佑
かばい合う手のり文鳥にすこしやけ　幸生
かばう手を出さぬ友情とは知らず　庸佑
一輪の花をかばって花が逝く　寿子
極楽の叔父がやんちゃな子を庇い　鬼遊
かばわれて心のたがが締まらない　楓楽
身をかばう知恵青虫も糞を出す　三男
母をかばう一生けんめいにかばう　鎮彦
頂上で転ぶとかばう草がいる　規不風
わた菓子をすこしちぎって子をかばう　作二郎
合唱で夫の音痴カバーする　耕花

兼題「先生」　白岩文衛選

アルバムの先生の横の小さい僕　春蘭
生徒より教育ママに手を焼かせ　文秋
先生を困らせた子がえらくなり　理恵
意欲的な眼が先生を離さない　智子
清濁をのむ先生になりきれず　水客
分校へ来て先生も訛りだし　潮花
先生がついておりますやりなはれ　山久
先生とマンツーマンの同じ汗　ひでの

先生が来たから漫画読み始め　太茂津
麦わら帽の日の先生はよく喋り　萬的
パパママのけんかも告げる先生に　信恵
先生に扶養家族が五人居る　射月芳
先生も立ち読みしてる漫画本　喜一郎
先生の目が後ろにもついている　形水
なぐられた先生一番懐しい　糸葉
ママゴトの先生癖もよくとらえ　朝代
先生が逃げる段取りばかりする　涼一
先生のペンだこはくぼく化粧する　信恵
先生の嬉しい癖も覚えられ　辰江
ぱったりと先生に出遇う風の街　刀水
先生を叱っていやはる親先生　幸生
先生々々と利用価値があり　水客
日曜日の先生葱をひいている　作二郎
先生の悪い癖まで習てくる　楓楽
先生がおごってくれたたこやき屋　栞
数学教師の指案外に不器用な　萬的
産休が明けた先生乳におい　喜一郎
分校の先生豚の世話もする　千代三
先生の墓で静かに叱られる　涼一
先生のその先生もいた母校　滋雀
酔うほどに先生説教調となる　吸江
先生の休暇お見合したそうな　武太
親に躾したいと先生思ってる　楓楽
つばめまた来て先生のヴァイオリン　作二郎
ボクの学校にもいてる山アラシ　千代三
先生が好きで宿題苦にならず　文衛

兼題「風」　板尾岳人選

どんな風吹いたか一本ついている　蕉露
しょうしょうと風は湖底の村を吹く　酔々
風死んで陽が脳天に落ちてくる　度
迷路からぬけると丸い風に会う　滋雀
ケーキ屋の噂を運んでくれた風　健司
振りむけば追いかけて来る風の私語　和子
ブランコが揺れると幼い風になる　美智子
想い出を繰れば白い風が吹く　史好
一陣の風を忍者は待っている　涼一
台風に敗されてやる釘を打つ　耕花
たとえばの話したのにつむじ風　泰子
旗色をうかがう風は敵にする　滋雀
横っ面なぐり飛ばした冬の風　潮花
ひき返す男の語尾が風で消え　刀水
北風へ男闘う顔となる　軒太郎
みそラーメン風の強さは考えず　健司
愛一途風に従う風ぐるま　寿子
不況風宗右衛門町で向きを変え　吸江
お化け屋敷で風の向きなど考える　酔々
勝運に乗ると風まで敵に吹く　紫香
遮断機が上がるとぬくい風になる　美智子
風あたり気にしていないさらし首　健司
竹の風裏切者を知っている　紫香
異人館通りに港からの風　作二郎
さむらいが真っ向う受ける北の風　酔々
風の彩もとめて落ちる花の首　千万子
風の音きれいなサインしてもらう　芳川
風吹けば掌には戻らぬ紙風船　泰子
風上でいつも喜劇を組みたてる　智子
教会の窓から風の蝶消える　作二郎
首塚にやさしきものは風ばかり　鬼遊

兼題「幸い」　若柳潮花選

幸いに異常なかった心電図　静馬
幸いは村の近くで雨に逢い　朝代
幸いに化粧忘れた妻がいる　吸江

川柳塔

富田林市　板尾岳人

湖の底に忘れた火消壺
リリアンを編む指先にある朦朧
冬に遭う柱時計にある陣痛
京人形抱きたくなった枯芒
キッスする太郎と花子檻の中

妻の留守これ幸いと酒をのむ　理恵
幸いを先取りにしてハネムーン　紫香
耳が遠くて幸いしたことも　千万子
反骨に生きて幸い持て余し　与呂志
幸せの風をタンポポじっと待つ　一二三
幸いに卒寿の母と古稀の兄　英子
幸いな余生は趣味に追われてる　きみ
幸いを招く仏間に灯をともす　美智子
幸いに気づかぬ不幸が多すぎる　元江
幸いが続き何だかこわくなる　庸佑
不幸中の幸い小さい怪我で済み　文秋
幸いは星がきれいに見えるとき　吸江
仕合せの真只中にいる不安　悦郎
幸いでポックリ寺は考えぬ　耕花
幸せを手鍋の中に詰めて置く　朝代
幸いが見たくて瞼とじている　規不風
定年へ余技が幸いする余裕　富子
尾を切られとかげは命拾いする　鬼遊
幸いを信じ育てた子沢山　喜一郎
真人間になる仕合せを買う男　雀踊子
弁当の数幸いな朝の音　重人
急病へ幸い医者が居た列車　紫香
幸いな風が向こう岸にある　美智子
不幸中の幸いだから話される　山久
幸いと思う貧者の灯をともす　富子
花活けて嫁く幸いをかみしめる　みさえ
バリウムのお蔭豆つぶほどの影　涼一
幸いは三度三度がおいしくて　勝美
幸いの薄い少女の伏目勝ち　糸葉
倖せに溺れて明日を摑めない　悦郎
幸いなことに手近な非常口　育園
見送った電車の事故をみるテレビ　博泉
芸が身を助ける妻がいて呉れる　水客
幸いをつかむ軍手を白く干す　重人
幸いは書類送検だけで済み　潮花

兼題「出会い」　橘高薫風選

出会いがしらはヤーと言いオーという　千代三
出会い頭自分の息子に頭下げ　花村
本物に出会うと似せ物かすんでき　洋敏
出会いから一直線にゴールイン　千万子
太陽が少し眩しくなる出会い　耕花
偶然の出会いのようなふりをする　庸佑
捨て犬を抱く児の温い瞳に出会い　富子
出会いから苦手意識に飲まれてる　静馬
避けているのによく出会う嫌な人　善紫
ある出会い明日渡米をすると言う　紫香
二人ずつ子供を連れていた出会い　健司
出会いから腹の一物見抜かれる　庸佑
出会いから続く楽しい灯に浸り　朝代
遠い日の出会い小雨の菖蒲園　射月芳
素晴らしき出会いホタルが飛んでいる　きみ
土曜日の画廊眺めていた出会い　美智子
おでん屋の出会いへ少し気がゆるむ　博泉
聞こえない振りをする日にふと出会い　朝代
或る出会い思い出せそで鼻をかむ　早苗
出会いさえなければ女泣きませぬ　潮花
まっ裸の出会いめしやの味噌汁に　雀踊子
大輪を咲かす出会いにめぐまれる　育園
すばらしい出会い待ってる銀の靴　千万子
出会いから知る一日のながさなど　智子
旅で会う仏が亡父の顔になる　一二三
シャガールの絵のどれからも出会いの日　作二郎
まばろしと逐に出会った古本屋　史好
不思議なる出会い師となり弟子となる　綾珠
駅前で出会う都会の人さらい　鬼遊
一冊の本にはさんである出会い　美智子
最高の出会いをあの世の母におく　幸生
眼鏡の雨拭いて山頭火に出会う　水客
出会いからひとりの傘が重くなる　智子
月天心男が出会うたのは男　薫風

★

【訂正】

★6月号45P川柳塔賞候補作品中、坂部紀久子さんの句を左のとおり訂正。

しまい湯へ今日のリズムを取り戻す

★38P（水煙抄）田中晴子さんの句

入院でることもなし**爪**を切る

■**原稿用紙を使用**。締切毎月末着便まで。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

（整理・香川酔々）

駒つなぎ川柳会　里

良心の痛みかくせぬ眼の動き　小路報
影武者をときどきおそう胃の痛み　頂留子
マザーテレサの痛みを競馬場で聞く　育園
ロボットに仕返ししたい痛み増す　史好
三日月のとがる痛さに逢わずいる　規不風
逆立ちをすればかくれていた痛み　美代
お賽銭投げて痛みを柔げる　アキラ
ふるさとを捨てた痛みと雨季になる　酔々
継母という痛みに耐える涙壺　信治
この人に添える女で満ち足りる　雀踊子
偶然のふたりに粋な雨が降り　鎮彦
貴婦人の鼻美しく芦屋駅　儀一
塔の美に魅せられ寺を巡礼す　眉水
飾らない寡婦に床しい美が匂う　綾珠
美しいレターが縁のおたふくで　甘平
そこで口添えたら話こじれるヨ　柳右子
添うてたら出世したかも知れず　凡九郎
親達の祝福なくも添うつもり　弘生
割り切れぬ話に咳を二つ三つ　恒明
会者定離割れる定めのあった壺　千代三
ロボットが割るのはいつも無精卵　文秋
割り箸も素直でしゃべる披露宴　重人
欲望はふくれて割れるシャボン玉　雅風
つき合わす割れた茶碗と妻の顔　射月芳
割り切れぬ話へ妻の知恵冴える　善信
病くない腹へ世間の目がそそぎ　柳伸
阪神が勝って忘れた歯の痛み　勝美
きずぐちが痛みだしたら旅にでる　小路
ブルドーザーに山の痛みは聞えない　健司

川柳化粧櫓　植村客遊子報

水引をかけて野心が届けられ　度
眉墨の濃ゆき女に隙が無い　紅月
タバコくわえた女が座る喫茶店　秋月
いつまでもつぼみでなかった日記帖　岳詩
六十の坂ガタが来てガタが来て　実男
うそでよい良い占が出てほしい　葉香
炉を切った畳へ春の香りする　大鷹
洋間より畳の部屋がよく眠れ　奮水
蹲くこと知らぬ男も老いてくる　永楽
キロで買い母は五合の飯を炊き　白李
断ち切ろうと思う悲恋を何度聞く　三青
畳替えすませ渋茶のうまい事　富多葉
初孫のまる一つにも目を細め　遊香
かくしてもとぼけても医者かぎつける　多津
湯豆腐へ桜前線北上中　客遊子

富田林富柳会　板尾　岳人報

魚偏すし屋のコップに書いてある　澄子
すし折が斜めにゆれて千鳥足　恒子
空罐も寝転んでいる花の下　進
吉野山花見にまじる河内弁　優
父の忌に母のお好きなちらしずし　為之助
しぶちんになっても金は逃げて行き　きぬ
手土産の寿司で三日も居候　伸子
しぶちんと思うていたのに女好き　喜酔
しぶちんが遺産すべてを寄付とする　与呂志
魚焼くしぶちん猫も知らん顔　勇
板前の威勢の良いのも味の内　美佐子
駅までの桜並木を遠回り　美緒
古傷にわんさと触れてくる満開　泰子
しぶちんの財ご近所が心配し　美代
三十年前のネクタイ洗濯し　花梢
公園で待つと口笛湧いてくる　岳人

勝山双葉川柳会　小出　智子報

幸せを待つ間に花が枯れてくる　柳伸
老後へのプランは楽しい方がいい　楓楽
バスを待つ間のパチンコよく入り　千里
お大切になさいともらう風邪薬　好子
スポンサーには大切なコマーシャル　田鶴子
座り直して老母大切な事を言う　千寿子
十カ月待たされ又も女の子　洋子
粗品券もらって財布もゆるみがち　恒子
虚しい日計画もなく駅へゆく　静子
待つ時はなかなか来ないお豆腐屋　いく子
大切な夫に保険かけている　久子
床の中明日のプランを考える　秋子
欲ばりのプランへ自分を苦しめる　千世子
おねだりの出来るプランに組み変える　好子
大切にしたくて石を拾ってる　いくの
大切な生命へ禁煙まだ出来ず　芙佐子
熱いお茶入れ替えプラン練り直し　静香
大切にされているよでこき使い　智慧子
あるプラン空があんまり青いので　節子
智子

尼崎いくしま川柳会　黒川　紫香報

一点の雲にだまされ傘を持ち　保　蔵
雲海の切れ目から覗く宇宙人　和　子
スキップでついてくる子は叱れない　ハツエ
包み紙包みなおして包まれず　中　石
いさり火が遠く近くに揺れて闇　紫　香
沿線の桜に足が下車しちゃう　すえ
途中下車してまで会いたい人があり　千　子
途中下車足がのれんに行きたがる　美智子
男なら一度は下車して賭けてみる　晴　子
交換手になろかとおもたこともある　まさ
電話口交換手出て　お母ちゃん　貞　子
交換の名刺に残り香ほのかなり　伊三郎
孫の入学祝うコインも今日門出　静　江
月世界に平賀源内ゆかせたい　美代子
過ぎし日のビー玉交換なつかしい　美紀子
謀反もつ男の舌は渇いてる　玉　子
ジーパンの娘が丁寧に会釈する　郁　栄
お手玉を抛り上げたよう雀二羽　晃　美
生ゴミのように人間花の下　幸　子
約束をころりわすれた春の旅　牧　郎

東大阪川柳同好会　斉藤三十四報

クラス会堂々赤チャン連れてくる　三十四
クラスなどなくて土俵は面白い　かずを
教壇に一輪飾ってあるクラス　度
いじわるの一人にクラス牛耳られ　綾　珠
分校のクラス硝子など破らぬ　喜　風
旧姓で自己紹介するクラス会　美　子
倖せなものだけ集るクラス会　六龍子
クラス会孫の自慢と嫁自慢　川狂子
クラス替え進学コース顔揃う　柳宏子
ローソクは過去の影まで写し出し　喜一郎
夢に見て喜んだ丈の宝くじ　良　京
新鮮を売物にする磯料理　白　屯
フレッシュなギャルで笑顔くずさない　湖　風
あみだ籤部長が芋を買いに行く　慶　三
唇をちゅうちょさせてる焼ギョウザ　柳　伸
にんにくがほのかに臭う男傘　酔々
にんにくで出稼ぎ冬をまるく抱く　雀踊子
にんにくの効き目話題の老人会　右　近
ジョギングもしてますにんにく喰べてます　帆　船

虹川柳倶楽部　新岡回天子報

峠道うぐいす谷は右左　実
おふくろの味かみしめる故里の宿　素　石
矢車が回り隣りの孫を知り　義　美
傷心をいたわるように春の雨　久仁於
急用を赤信号があざ笑う　正　敏
平瀬香魚翔んで薫風峡若葉　朴　竜
他人には甘く夫には辛い点　千　代
亡き母を偲ぶよすがの冷し瓜　紫　泉
ひと言のバカが嬉しい時もある　千　花
誘惑に勝って淋しい娘は帰り　一　竿
革命の度に新種の罪がふえ　四　郎
鯉のぼり上げたら風が止みました　虹　汀
年金で碁を打つくらし友が居り　回天子

うみなり川柳会　小林由多香報

晴天の句会気になる農作業　正
海からの風晴天をくぐり抜け　希満子
寝ころべば私へ広がる青い空　とし江
晴天へひばりの夢をこわすまい　雄　人
病窓へ桜の便りぴら添える　一　止
友好の桜異国へ咲きつづけ　天　人
日本のさくらに大陸孤児が酔い　洋々
犯罪を隠そうための芝居組む　笑　王
黒幕の手先でピエロ芝居する　単　車
猿芝居猿の機嫌で幕をあけ　由多香
田舎芝居背景の富士破れてる　葉士人
鼻一つせり合う馬に夢を賭け　一　汀
わんぱくに先頭の蟻向きを変え　華　子
先頭は峠に待っているゆとり　貞　山
逆転を信じて一歩後を行く　熊　生
先頭の余裕後尾に気を配り　舟　宏
先頭の気まま曲った蟻の列　静　夫

南大阪川柳会　中川　滋雀報

座をはずす話へ嫁という他人　雀踊子
座布団の温みを他人だと思う　智　子
銀行に口座があって金が無い　あいき
座敷をうろうろ吉報がまだ来ない　文　秋
ゆっくりと流れが変る女の座　公　一
2DK座敷と呼べる部屋が無い　綾　珠
失意の日自分を責めることばかり　楓　楽
母の座の祈りは自分を越えている　美　幸
皿洗う自分学費を稼がねば　千代三
自分しか負えぬ重荷に耐えている　柳宏子
恐さ消えると鼻に自分がぶら下がる　度
売り込むと自分が軽く見られそう　洋　子
春の野に転べば小さくなる自分　弘　生
ある善意自己満足をしておこう　節　子
自分を笑う鏡の声がする　一二三
ずぶぬれの少年新聞ぬらさない　鎮　彦
ずぶぬれも覚悟の上の使命感　勝　美
春雨の絵にはならないぬれねずみ　久　子
パートナーだから善意を信じ切る　柳　伸

反抗期だから善意にとっておく　酔々
善意での言葉できずつくのも女　頂留子
善意の輪ひろげた人が輪の外に　重人
少年の善意へヒップ大きすぎ　蘭
催促がなくて善意に鞭が要り　喜風
鬼もいっしょに抱き込んでいる善意　千楠
気まぐれの善意が今朝の記事になり　儀一
第三者の目にぞろぞろがしれったい　恒明
五つ子のぞろぞろみんなに見守られ　雅風
ぞろぞろと手の鳴る方の罠へ落ち　滋雀

川柳塔まつえ　恒松　叮紅報

我が城は女ばかりの城になり　雪美
ロケットのとどかぬ城よモグラの巣　三和
只守るだけの城ではもの足らず　愚童
千鳥城見えて嬉しい里帰り　芳子
観光地臍のあたり城聳え　与根一
塾通い母の広場で遊べない　芳枝
広い空小さな鳥が我がものに　春楠
百円玉ひとつ広場の中で捨て　正朗
ただ広いだけが取り得で住み慣れる　逓児
憂うつを海の広さへ捨ててくる　巡歩
広い海に出れば少年もう泣かぬ　きみえ
裏町に叙勲輝く人が住み　由郎
輝きがぼけてメッキが落ちかかり　早苗
艶のない指で宝石輝いて　みのる
輝いて輝いて落ちるほかない夕陽なり　天痴人
輝きが戻る河なり鮭帰る　孤呂二
回れ右して本当は好きと言う　紫吻
好きですが足踏みをさす年になり　新雪
好き嫌いはっきりいえてまだ一人　鶴丸
好きですと蚊のなく様な声でいい　登美也

甲子園涙の滲みた砂掬う　多賀子
無事日銭かせぎ軍手の砂はらう　舞吉
退く波に砂がつぶやく独り言　寿美子
砂に字を書いて別れをつらくする　叮紅

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

ひとつ辻曲ると伸びてくる尻尾　百合子
目標を持たず過して来た焦り　一扇
スランプの焦りを妻がもみほぐし　登
買物で焦りもかごに入れてくる　雄峰
意志曲げたところで砂がくずれ出す　博泉
病み伏して窓の日ざしに気が焦り　雅洋
スラックス脱げば女の脚である　亜成
スラックス我慢の後のしわ一つ　魚三
スラックス身軽にとんでるルポライター　亜也子
焦るまい独身貴族の花でよし　てまり
春のいて焦だつように雨が降り　美佐子
責任の重さの中にある焦り　有一
あれこれと焦ることあり寝つかれず　千夢
下町を曲るとそこには呉味の市　聖地
妹の披露宴から焦りだす　度
連敗の焦り選手を替え過ぎる　形水
曲げられぬ意見を持って席につき　入仙

西宮北口川柳会　杉浦婦美子報

行くところみんな同じと鐘が鳴る　はつ絵
パパの夢天まで届け肩車　〆女
失意の日百万弗も瞳に入らず　半歩
冷えた愛だまって林檎むいてくれ　冬子
一日のドラマが終る布団敷く　いわる
腰痛もゲートボールで吹っ飛ばせ　みかど
からっぽの貨車が北の果てに着く　美智子
見よ旅人よ吉里吉里人のユートピア　伊升

生薬屋にプラスアルファが棲んでいる　弘生
無医村の備え富山の置き薬　右近
薬売りと老婆絵になる囲炉裏端　静馬
睡眠薬持った安堵へよく眠り　春子
子の相手せぬ休日よスト日和　宏子
労使共食事に出かけスト続く　紫香
ストライキ　タクトが高し高過ぎる　文平
遠回りすみれ見つけるストの朝　みつ子
時間まではっきり書いてストに入り　正祐
ストしても物価が上がるいたちごっこ　隆子
女とて家事ストしたき時もあり　千子
花の雨ひとは別れをくりかえす　幽香
桜吹雪別れた人に未練なし　千世子

京都塔の会　松川　杜的報

佳句地10選（前月号から）

那須鎮彦選

卒業式なみだはふかぬことにする　小六紀
さりげなく席をゆずって遠く立ち　寿幸
善人の嘘唇がすぐ乾く　六龍子
神様を毎年変える初詣　登
日曜日家族揃ってつくし摘む　昇
一輪の花の香りでたりる部屋　野生
陽が落ちてこんぺい糖が光り出し　志保
あじさいよ約束ごとはせぬように　君子
先輩より少うし安いタイを買う　度
暖かい微風のような人である　千子

趣味のない男に趣味を貰められる　紫香
土筆摘む母子に春の詩をもらう　明代
うちの娘もまんざらでない日本髪　飛鳥
パタパタと破れ障子の音は冬　遊香
積木つんだ過去を男は口にせず　水客
憎めないほらふきだったとなつかしみ　白渓子
花吹雪今年も桜おわりけり　弘三
花吹雪死角に易の灯が小さい　和友
自家用の窓へ散り込む花吹雪　花代子
花吹雪別れ話が切り出せず　潮花
職安を出ればきれいな花吹雪　白李
窓口がつい先のない指を見た　求芽
血眼になればなるほど見損い　笛珠
喝采の陰に血眼の舞台裏　杜的
血眼で振ると反旗にみえてくる　紅陽
血眼になって女をさらけ出し　芳子

川柳ウイロー社　前山　北海報

肩すかし美事に決まり勝ち名乗り　北海
同情も肩入れ過ぎて疑われ　嗣栄
引越しへ肩かして居る男同士　三石
肩よせて歩いた遠い遠い過去　カロ女
子巣立ち肩の荷やっと軽くなり　張賀
一生を聞いてと按摩肩をもみ　暁舟
上出来と肩をたたいて褒める父　健
肩濡れて妻の邪推が揉めのもと　秀山
頑張れと肩をたたいて目に涙　公女
名門に肩身が狭い子が生まれ　拝山
ほめられて肩ちょっと上げ得意がる　歌子
肩書を名刺に並べ自画自賛　三十四
肩の荷を下して近頃ぼけ始め　万里歩
母の肩叩いてねだるへそくりを　蒼生
肩叩く友の賛成また嬉し　十吉
夫婦仲肩もみ合いてほほえまし　黄塵
祖父の肩係がもんでる誕生日　雪女
出前持ちそば肩にして今日は　千代女
肩たたき互いの骨を拾う仲　高原子
風呂あがり肩もみしよと孫の知恵　紅渓
肩書があるに愛称で口を割り　風影

堀端　三男報

決断の封書へ確かと貼る切手　幸
ハタを織る手許が狂う祭笛　稚代
ありがとう素直に言えた仲直り　裕美
雑音が嫌で苦手の舞を舞う　公子
苦手の顔を薬に今日も生き　善太
苦手など言っておられぬ今日の糧　登志代
苦手から取りかかろうか明日がある　英子
苦手ですだけど気になる女の瞳　紀久子
政治論苦手で小さな城守る　紀美女
仲直りお部屋が急に広くなり　あつむ
仲直り海はあくまで凪いでいる　三男
青葉若葉が悟りをくれた仲直り　太茂津
歳月へ罪を埋めて仲直り　三千代
握手した温もり信じ仲直り　佐代子
仲直りせぬまま君は西の旅　克子
郵便屋も知る督促の多い家　十郎
明暗をわけて郵便受が鳴る　和子
郵便で旅より先につく土産　天彦
灯台へ郵便船が久し振り　酔々
一通の郵便一家の瞳が光る　光代
郵便局から郵便番号書かず来た　千寿子
母からの郵便変体仮名に泣き　勇太
温もりを祭りで知った左遷の地　緑良
お祭りへ世代を越えた気の揃い　武雄
郵便を拒んで深くなる絆　寿子
枠をはずせばなんでもない苦手　きみ
郵便受けずらり並んで子の名前　忠雄
郵便でやんわり借金せめてくる　武太

川柳しんぐう　川上　渓水報

摘む時期を逸して悪の芽が伸びる　まさ子
つまづいた所で貴重な芽を見付け　渓水
触れ合った手から小さな恋芽生え　大輪
ささやかな菜園を得て出る芽待つ　冬花
年老いて庭の新芽を見るばかり　富子
同情を蹴られたお蔭今日の地位　伸子
同情をされて貰った金で飲み　白光子
同情へ一線引いておつき合い　昌子
同情をされてる方がゆとりもつ　澄孝
同情へ姿崩さぬ母子草　勇太
第三者の知恵を家裁へ借りに行く　利凡
義理で泣き義理で聞いてる第三者　英子
堪えている笑顔と知らぬ第三者　登紀夫
安全な立場崩さぬ第三者　三千代
第三者の位置で口が軽くなる　孝一
ぴったりと指紋が合って逃げ切れず　大輪
ぴったりと行かず見合は断わられ　冬花
ぴったりと三味と人形の呼吸が合い　伸子
ぴったりと合った記憶に孤児の春　白光子
欲しいとは言わずぴったりですと妻　弘生

川柳ささやま　河原みのる報

天井へ春風誘う千羽鶴　越山
寝そびれて天井に描く過去の夢　貞子
耳と目がある天井がこわくなり　ひか平
職退いて青天井が高すぎる　宗珠

手本などいらぬ母の目分量　千代子
お手本のきびしい師匠の花鋏　文平
手を合わす祖母を手本に子を育て　テル
手本には無い天才の芽が伸びる　和子
崩し書き許さぬカタカナ面白い　法斉
しつっこくカタカナ玩具聞きなおす　とみ子
片仮名を辞書引いてみて苦笑い　和子
コーヒーへほのかなワインのかくし味　久子
お祝いのコーヒーセットも余し　みつる
コーヒーの味はどうでもよい二人　可住
咲かぬ花忘れるコーヒー熱くして　ゆう也

山長川柳会　**那須鎮彦報**

冷もよし燗も又よし梅錦　秀勝
パパ有りて子供もありて梅錦　真寿恵
梅錦夫婦喧嘩の仲をとり　恵子
一日の疲れふっとぶ梅錦　伍一
梅錦あてはかあちゃんあればよい　春男
梅錦のんで男は明日を見る　忠
頑固親父一杯やっか梅錦　和子
雪月花誘うて匂う梅錦　安弘
二〇歳今日から飲める梅錦　真由美
頑張るぞ明日は仕事だ梅錦　昇
一と言が心に残る梅錦　守
梅錦のんでやすらぐカタツムリ　一美
紙どころ紙より愛し梅錦　嘉道
ぬる燗の人生もよし梅錦　鎮彦

菜の花句会　**高杉鬼遊報**

自分追う瞳を胸の底に置く　凡九郎
梅干の種に仏の顔がある　酔々
ランチより酒と肴の店に寄る　みつる
土手の土みたいにたんぽぽ開花する　与呂志
良心の歩幅を汚職踏みはずし　儀一
X線あてて仏を怒らせる　度
たんぽぽを幼児が吹くと詩になる　昭子
良心が許しませんと立てる義理　覚然坊
写経百枚仏様から返事来ず　シマ子
サンプルにいつわりのあるランチ来る　蕉路
良心がチョッピリ政治家にはなれぬ　幸生
母の絵を描くと仏の顔になる　弥生
お子様ランチに旗を立てたのは誰だ　美幸
追いつめてとても悲しい目と出会う　道子
大声でスペシャルランチ通される　柳宏子
良心を守り通した窓の席　糸葉
プリンが好きでお子様ランチにする　冬葉
陸橋のまん中へ置いてきた良心　健司
パンにするか飯にするかと聞くランチ　射月芳
たんぽぽと遍路みどりの風を追う　頂留子
野菊持つ少女がさがす石地蔵　柳伸
拝観料仏はさらし物になる　雀踊子
日替りのランチに春の色があり　鬼遊

わかあゆ川柳会　**小砂白汀報**

背伸びした幸せなれば逃げ易し　ふみ
流れ星祈りをこめるひまもなし　志保
先生の顔して実習胸を張り　秀穂
いま少し実習足らぬ嫁の味　恒星
土佐犬は悲しからずや同士討ち　歳栄
翔べぬから倖せかもねあひるさん　美栄
太陽を背に実習の青い服　清泉
年寄へ春の陽脚が伸びてくる　清夢
実習の味も一品そえてあり　輝水
実習のつもりで生きてふりむかず　鈴江
ハンカチの白実習船へ遠ざかる　民子
実習の効果をためす耕耘機　敏明
実習の布団で温い夢むすぶ　ヒデ子
実習へ血は争えぬ大工の子　芳枝
実習の浴衣が夏の間に合わぬ　はるみ
あひるにはあひるの掟川凍る　白汀

岸和田川柳会　**植山武助報**

偉人伝ばかり読んでた三男坊　ひで
物語り残して村はダムの底　こう
泣いて笑ってなだめて愛妻物語　武助
ほのかなる思慕ペンダントにある写真　世界人
鯉のぼりと撮って成長知らされる　せつ子
自信やや出来てカメラを買い替る　白光子
逝きし子の歳は写真のそのまんま　操子
給料の前借りで発つジャルパック　甘平
仏前へ給料母と子の家庭　佳生
給料がこんなに軽い物価高　春栄
給料の範囲で小さい夢を持つ　冨志子
集金へ尻尾振ってる内の犬　加仙
靴磨く四十年の癖を履く　浪速子
九十まで生きれば人生まだ長い　加代子
貯金皆子に注ぎ込んで五十坂　射月芳

題別句集

東　照　**頒価千六百円**（送料共）

送金先　振替口座大阪六―七〇七五

番傘紅白川柳会　**岸田万彩郎**

〒565　吹田市古江台三―一五―三

にた川柳会　西村　早苗報

国体のメニューにっこり試食する　登美也
いい寝息こんどは僕が聞いている　正朗
気まずさが少し残って重い箸　芳子
寝ころんでひとりポリポリ気の楽さ　きみえ
懐かしく聞くあの頃の恨み言　独仙
運勢もいろいろ印相研究所　亀甲
子離れの早い女がペット飼う　多賀子
古稀の坂まで恥しい夢を追う　巡歩
どん栗の中から選ぶ天地人　幸一
一人佇つ女へ車族の虫が寄る　夢酔
身から出た錆国もとへ問い合せ　花子
オス同士春をあらそう花の園　三和
あかぎれの手にばら色の過去はない　栄
新婚の便りおかずの味加減　寿美子
歯に衣きせぬ男の道もある　裕
花しょうぶ雨よ降れふれ訣れの日　〆女
かけひきも一息ついてレモンティ　雄々
文は人なんていうから書きしぶる　弘朗
わかれ道きめる女がとまどうて　早苗

川柳ねやがわ　高田　博泉報

鐘乳洞雫の音にすくむ足　花世
週末は日程つまる花の月　マサノ
置時計見ているはずの長っ尻　柳歩
春闘は賃上げを追いストを追い　勇三郎
往年の二枚目仏壇コマーシャル　ふみ
洞窟の闇に時間も距離もない　一菁
引出物一つ一つに顔がある　勝美
郵便を頼まれている山のバス　紫香
知恵くらべ追われる雀も生があり　一笑
悲しみを握ればお結び固くなり　かすみ
信号で捕えた月の丸い事　淳朗
きな臭いニュースに洞窟顔を出す　清香
ルーツ追う祖母の話に嘘がある　冬葉
神話有る洞窟蛙ぴょんと飛び　一途
翔ぶ友を追うて身の程知る疲れ　琴音
洞窟を抜けたら仏の顔になり　てまり
侮ったむくいは亀を追い越せず　晴風
風花も淋しく舞うている左遷　亜也子
安らかな赤子の寝顔に安らぎぬ　亜成
冗談が過ぎて倒産してしまい　野生
追いついた時はライバルもう居ない　博泉
冗談の中に隠れる針もある　右近
追風がやむとどうしようも無い男　光夫
ひまわりは黄に郵便物溜まる　酔々
冗談の仲間に窓ぎわ弾かれる　亜鈍
冗談をまともに聞いた日の落ち目　覚然坊
郵便夫素通りをして眠い昼　白史
郵便が来て日暦を剝ぎに立つ　入仙
追って来る犬血統書が追っ払う　あいき
着流しで市長が来てる通り抜け　薫風

川柳大阪　西岡　洛酔報

脱税といわず申告漏れで済み　君枝
咲かせるも散らすも同じ春の風　酔花
雄大な富士へああの感嘆詞　ひろ子
タイマーに忙がされ人間こまねずみ　秀峰
曇のち晴れ夫婦の部屋で温める　洛酔
ポックリ寺そんなにうまくいきまへん　重人
屋根伝い塀乗り越えて猫の恋　みつる
気がかりなまま歩幅が狭くなる　与呂志
もう二度と来ぬ今日の日が無為に暮れ　本蔭棒
ぼんやりとかすんで星座も春の位置　比呂志
他人でもやっと着いたか救急車　笑風
信頼の腹へぶつかり確かめる　喜酔
通り魔は見事に風を切って逃げ　芳川
深い井戸ふるさとすでに過疎となる　眉水
交叉して地下鉄深い駅となる　弘生
大一番勝負所で深い読み　天平
愛だけを信じたらしい深い仲　道子
商魂は乗り場を奥へ移しかえ　敏
花見客去って新聞たたく雨　希久志

南海川柳部　広井すえお報

後継者ロボットが後継いでくれ　東雲
先代より芸の重味を受けついで　いづ枝
この燈り消してはならぬ後継者　千万子
人間国宝褒めて後継考えず　雅風
後継者悲しい耳を抱いている　悦郎
順番でない後継者に噂とぶ　圭水
引出物一つ一つに顔がある　勝美
引出物　宴の熱気持ちかえり　宏子
風呂敷に引出物らし皆晴れ着　儀一
引出物先様値打ち分かるかな　春蘭
花嫁の手作り嬉しい引出物　とし子
風呂敷も中味も統一引出物　信江
新妻は梅酒作りを母にきく　白梅
青梅が出ると梅酒の準備する　綾珠
今年こそ梅酒作ろう母偲び　さよ

川柳後楽　井上柳五郎報

子供の日生きたおもちゃをねだりたし　定平
鯉幟少女もほしい子供の日　番茶
子供の日子供の知恵に引っかかり　哲郎
おしゃべりで心の不安を一掃し　隆
公園で伝言板が欲しくなり　博友

川柳の公園句碑が語りかけ　柳五郎
平和公園鳩が翔べなくなっている　草風
デートする場所を公園決めてくれ　久米雄
日曜の公園鯉は麩に飽きる　胡風
公園の夜を恥ずかしく通り抜け　青銅
器量より姉より先に縁があり　元一
ご器量は良いのですがと後にごし　七面山
器量よしどうして嫁かぬかと問われ　宏大
風に身を躍らせて行く器量よし　恒洋
お喋りは電話料など気にならず　秋月
ネクタイを緩めて喋る時を待ち　鮫虎狼
喋るだけ喋って後は大いびき　玉水
ぎこちない喋りに本音さらけだし　照路
公園を使わぬ人がよく奉仕　たけ志

川柳たけはら　森井　菁居報

スズメさんくさりがなくてよかったね　小一方昭
さくらのめふくらんできたすぐ春よ　小三亜貴子
なかよしとわかれたくないクラスがえ　小五仁昭
妹とケンカするのも今のうち　中一希世子
母さんの期待が重い中学生　中一紀
入学式まだ高一になりきれず　高一愛
砂の塔築く家内の小商い　静水
お念仏不思議に気持やすらぎて　房子
春の川ドレミファソラシドと流れ　笑子
花冷えよ宗教書など読んでみる　比呂子
春日遅々親子で円くする朝寝　鈍舟
花ひらく散りぎわ思うことしきり　秀水
歳時記を抜け出て季語が喋り出す　節夫
新緑よふいに逆立ちしたくなる　蘭幸
話題なき夫婦に孫のことばかり　貞子
鎧買う男のもろさ見てしまう　菁居

画布を張り換えて構図が浮かばない　一路
豊かさの中でなくした瞳が買えぬ　令子
一日一日生きてる証し老いのペン　シゲヨ
優越感みすぼらしいとふと思う　のばら
吾子が笑うと私は五月の風になる　正子

城北川柳会　川口　弘生報

ロボットに感心ばかりしておれぬ　松太朗
連休のパパに恵みの雨が降り　倫子
妻の注ぐ酒には愚痴が付いて来る　頼一
かなう夢かなわぬ夢が見えて老い　利義
春深し此処だけ白き花水木　達一郎
孫ひるねパンダも人形もほっとする　登志代
周遊券買ってレールに乗せられる　圭介
高速の夜は都会のネックレス　好恵
バーゲンで一寸派手目な服を買い　倫子
深刻な話は止そう豆ご飯　婦美子
言うだけは言うて波紋の中にいる　静子
母の日の姑と母への品選ぶ　美恵
幸せな五月　八百屋の店先で　満津子
喜寿祝う子の顔ごとにある昔　公一
ポン菓子屋これも祭の音の一つ　新一郎
一泊に妻言い残すこと多く　右近
売る人の愚痴聞きながら特価品　道子
銀行へ行く顔入れる顔に見え　悟郎
新聞が俺の手彫りを褒めにくる　三十四
わらび摘むただ松風を友とする　星斗
温泉の宿で貧乏性が早く起き　テルミ
老いの身も山菜取りに若返り　すみれ
ハイと言う返事教える入園児　正之
葉桜にそれぞれ名残り惜しい春　ふみ
数学の天才下手な数字書く　英壬子

今日ひと日悔いがなかった陽に浸る　千子
使い捨て聖徳太子が呆れてる　静歩
すかんぽをかじりし友も今は古稀　そとえ
スポーツ紙で老いの血潮をわき立たせ　炉斉
一休みコーヒータイムのマンガ本　三和
お見合いの返事ないまま今日も暮れ　弘生
正確な時計を持って気のゆとり　捷一
入院をするにも姑に気をつかい　左春
浅香山ここはつつじの通り抜け　秀村
熟年の趣味へ乗り気がふと生れ　千世子
凡人の朝はテレビの欄を見る　晴子
五月晴風呂場のペンキまでも塗る　富久子
一と呼吸おいてゆとりのある乗り気　笑風
甘言へつい乗せられて損をする　忠夫
思案なかば友の勧めにわく勇気　茂樹
娘の縁談乗り気になったが茶々が入り　午郎
先客が顔も出さない何かある　仙吉郎
スーパーの先客仰山買いよった　眉水

堺川柳会　河内　天笑報

生きているしるしに風邪をひいてます　天笑
デパートに義理のしるしを送らせる　紀美女
景観の城を塞いだノッポビル　左久良
少年の望遠鏡に鯉ばかり　富子
鯉のぼり女系家族へうれしい日　月子
鯉のぼり後継ぐことを約される　千万子
ストの朝牛は線路の草をかみ　東雲
スト権を持たぬ拳を握りしめ　笑痴
城栄えみかんの山は花ざかり　柳伸
平家蟹うらみのしるし背なにある　酔々
失言のあとから口へ蓋をする　鬼遊
蓋あけたとたんに勝負ついていた　与呂志

第18回路郎忌・七月句会

日時　七月七日（水）午後六時

会場　なにわ会館
天王寺区石ヶ辻町19－12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話　06・772・1441番

兼題
おはなし　阿部柳太
「意外」　笠原吸江選
「喋る」　金井文秋選
「表彰」　礒野いさ[illegible]
「道標」　西尾[illegible]選

席題　二題　[illegible]
会費　五百円

各題三句以内厳守

★投句は柳[illegible]に一葉一題、郵券200円同封のこ[illegible]。

川　[illegible]　塔　社

8月の兼題　「定義」「実行」「待つ」「直感」

本社8月句会は7日（土）

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも　心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です

大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

・募　集・

九月号発表（7月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「窓」　笠原吸江選
「ボタン」　土岐トク子選
「週末」　文川野生選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十月号発表（8月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「少女」　栗林光夫選
「屑」　崎山美子選
「立つ」　水野弘選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

7月の常任理事会は1日　5時から

定価　五百円（送料45円）
半年分　三千二百円（送料共）
一年分　六千三百円（送料共）
昭和五十七年六月二十五日印刷
昭和五十七年七月一日発行
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二－一〇－一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六三九－六九一四番
振替口座大阪・三三三六八番

肉体疲労時のVB1補給に——
アリナミンA
アリナミンA25の効能＝肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB1補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
武田薬品工業株式会社　〒541 大阪市東区道修町2-27
タケダ

＝編集後記＝

☆七夕忌とも言える路郎忌が巡って来た。川柳雑誌の創生期の編集後記を読めば路郎先生のしばしば病臥の苦闘ぶりと、それを介添えする緑雨氏の真執さに打たれる。人間、折おりにご先祖を振り返ることで、力が湧いてくるものだ。

☆五月三十日、福永清造先生一周忌の句会に出席、光悦寺にあるお墓に水を掛けて来た。光悦は美しい姿の鷹ケ峰と、若狭から来る新鮮な魚に目が無くて、京への入口に住いしたのではなかったろうか。魚好き、殊にグジの頭の塩焼きには（身は好まない）猫のように咽喉を鳴らす私らしい発想。

☆六月十三日には川柳の町弓削に、中島生々庵主幹の「浮き草は浮き草なりに花が咲き」の句碑が建った。詳細は次号で。（薫）

★七夕竹惜命の文字隠れなし（石田波郷）

七月といえば、すぐ浮かぶのが七夕祭すなわち星祭であろう。もともと陰暦七月[illegible]れた行事であるが、現在では陽暦七月七日に行なうところが[illegible]仙台の七夕祭は、全国的に知られているし、東北のねぶた祭も、七夕にちなんだものである。七夕祭は、平安朝時代にも朝廷や貴族の間で行われたといわれる。中国にある牽牛・織女の伝説とこれから出た中国の行事が渡来し、わが国の棚機津女の信仰に習合されたものという。笹竹に詩や歌を書いた短冊形の色紙をつるし、物手台や窓辺に立てて書や裁縫の上達を祈ったものである。むかし懐しい夏の風物詩の一つといえよう

★牽牛と織女を会わす笹の先。（酔）

▼東京大学の国文学を担当している某氏から便りを頂戴した。「武玉川」を研究会でとり上げたいが「川柳雑誌」の昭和八年の一部と昭和十一年を見せてもらえないかとの事なので、塩満敏氏から彼の蔵本を借用した。梅本秋農屋、森東魚、蛭子省二の三氏による〝武玉川初篇研究〟と〝武玉川二篇研究〟の輪講掲載記事がある。私の知らない時代に[illegible]先輩たちが、営々と蓄積された遺産が掘りおこされ、いま陽の目を見ようとしている。ありがたいことである。雑誌つくりは苦労の割に映えないものである。「川柳雑誌」から「川柳塔」へ第六六二号を数える。単なる同人の機関誌で終ることのないよう明日の雑誌づくりに励まねばと自戒している。（き）

★本を読むスピードが年と共に落ちて行く。一つには眼の悪いせいもあるが、それより、やはり根気の問題か。そんな僕が珍しく一気呵成に読んだ本がある。山口洋子のエッセー「こんな男に惚れてみろ」。

★幾つ何十になっても女にモテたい、これが男の本音だろう。著者はご存知、作詞家であり、銀座の高級クラブ「姫」のママ。モテる秘訣が何ぞあろうかとB6判二二〇頁を一夜で読んだ次第だが、その結論はといえば「モテるか、モテないか、それは才能というか資質というか、持って生れたもの以外にない。努力とか根性ではどうにもならん」

★かくて一縷の望みも絶たれたが、川柳にも同じように努力だけでは破れない厚いカベがあるような気がする。

★本社句会の会場が今月から「なにわ会館」に変わるのでご注意の程を。（史）

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和五十七年六月二十五日　印刷
昭和五十七年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六六二号　川柳塔　七月号
定価　五百円（送料四十五円）

姉妹品大和錦印
九櫻
警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定
柔道衣
剣道具
早川繊維工業株式会社
大阪支店
大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電話（779）1690～2番

この夏、おいしさひとりじめ……
アイスキャンデー
宇治金時・あずき・チョコ・ミルク・パイン
高島屋　そごう　松坂屋　阪神　ドージカ店
近鉄（アベノ・上六・奈良・東大阪・京都各店）
サン・ストア（中之島・淀屋橋各店）
京阪モール　新川売店　虹のまち店
泉北高島屋　南海難波駅構店
国鉄大阪駅店
大阪・なんば
551 HORAI
蓬莱
TEL (641) 0551

雑誌 05703－7